

上原E遺跡

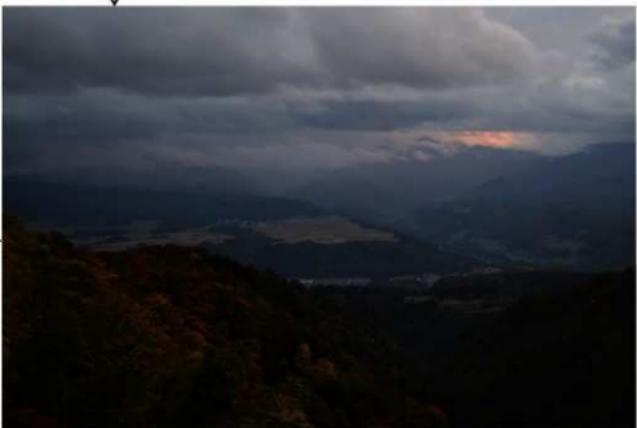
—2022年度発掘調査報告書—

2023

上原E遺跡発掘調査団・新潟大学考古学研究室

表紙・裏表紙図版

上原E遺跡 2022年度発掘調査出土
礪器





(1) TP02 出土碟器 (Scale=100%)



(2) TP02 碟器出土状況

序 文

苗場山麓の隆起と信濃川の浸食によって形成された津南町の河岸段丘には、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が多く立地し、県内でも有数の遺跡密度を誇ります。とくに1956年に第一次、1957年に第二次の発掘調査が行われ、「本ノ木論争」の舞台ともなった本ノ木遺跡は学史的にも著名です。2019年には十日町市の田沢・壬遺跡と共に「本ノ木・田沢遺跡群」として国史跡に指定されたほか、2020年には出土品が国の重要文化財に指定されるなど、近年再度注目を集めています。

2000年に津南町教育委員会によって発掘調査がなされた上原E遺跡では約9千点もの後期旧石器時代終末期の石器が出土しました。ホロカ技法で製作されながらも擦痕が施された細石刃核が多量に確認された遺跡は本州で他に例が無く、東日本における細石刃石器群の波及・拡散について一石を投じるものでした。この調査は津南町教育委員会の方々が尽力され、実現したものとうかがっています。日頃より遺跡の保存・活用や丹念な記録保存に努めてこられた津南町の方々の姿勢には深く感銘いたします。

こうした背景の元、新潟大学の教員・学生を中心とした上原E遺跡発掘調査団（代表：青木要祐）が組織され、本年度に上原E遺跡の発掘調査を実施しました。調査地は2000年調査範囲の南側隣接地にあたります。調査の結果、地表下約60cmから礫器が出土しました。約3万年前に鹿児島県から飛来した姶良丹沢火山灰層と約1万6千年前に群馬県から飛来した浅間草津軽石層の間から出土しており、その間に残された後期旧石器時代の石器と考えられます。2000年の発掘調査で出土した細石刃石器群よりも下位層準から出土しており、より古い時期にもこの地域に人々が暮らしていたことを今日に伝える、重要な資料といえます。

このような貴重な成果が得られたのは、城原地区をはじめとした地元の方々、教育長島田敏夫氏をはじめとした津南町教育委員会の皆様のご協力のおかげです。心より御礼申し上げます。

本報告書が学界に寄与することはもちろん、地域の文化振興にも活用されることを祈念して、序文といたします。

2023年3月23日

新潟大学人文学部教授

白石 典之

例 言

- 1 本書は、上原E遺跡（新潟県中魚沼郡津南町大字上郷大井平 5474-1・5475-2）の2022年度発掘調査の成果をまとめた学術研究書である。
- 2 本遺跡の埋蔵文化財包蔵地登録名称は「上原E遺跡」（新潟県 遺跡番号 225）で、本書ではこれに準ずる。
- 3 調査は上原E遺跡発掘調査団（代表：青木要祐・新潟大学人文社会科学系助教）が主体となり、令和4（2022）年9月10日から9月19日に実施した。調査担当者は青木で、森 貴教（新潟大学研究推進機構超域学術院助教）が補助した。調査にあたっては、佐藤雅一・佐藤信之・長澤展生（津南町教育委員会）にご指導・ご協力いただいた。なお、調査は令和4年度新潟大学人文社会・教育科学授業科目「考古学実習C」および学芸員資格取得のための履修単位（野外実習）、本書の作成は「考古学実習B」の一環として実施した。
- 4 調査参加者は第3章第2節に記した。
- 5 測量および土層の実測は青木と新潟大学人文学部・学生が行った。
- 6 出土遺物の実測は青木と新潟大学人文学部・学生が行い、製図は青木が行った。
- 7 土層および遺物の写真撮影は青木と新潟大学人文学部・学生が行った。
- 8 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』（38版、2016年）に準拠した。
- 9 石器及び礫の石材は高澤栄一氏（新潟大学理学部）にご鑑定いただき、第5章第1節に玉稿を賜った。火山灰分析は（株）古環境研究所に依頼し、同第2節に玉稿を賜った。
- 10 本書で用いる方位は真北である。
- 11 本書は各項末尾に明記した者が分担執筆した。
- 12 本書に掲載した出土遺物は、本報告の後に津南町が所蔵管理する。
- 13 調査に際して、津南町教育委員会（教育長 島田敏夫）の全面的なご支援・ご協力いただいた。
- 14 本遺跡の発掘調査・整理作業にあたっては以下の方々から格別のご指導、ご教示を賜ったほか、「第35回東北日本の旧石器文化を語る会」では資料検討会にて多くの方々からご意見を頂いた。記して御礼申し上げます。
阿部 敏・阿部紀佳・岩瀬 彰・梅川隆寛・小野章太郎・笠井洋祐・鹿又喜隆・坂梨 夏代・櫻沢孝敏・沢田 敦・渋谷孝雄・白石典之・傍島健太・高澤栄一・田海義正・直江康雄・中沢祐一・長崎潤一・長沼正樹・森先一貴・諸星良一・吉井雅勇・（株）古環境研究所、（株）シン技術コンサル （敬称略、五十音順）
また、地権者の樋口美喜雄氏・樋口公人氏・樋口大器氏には格別のご配慮を頂いた。公民館を利用させていただいた城原地区の皆様、宿舎として利用させていただいた花とほたる湯のさと雪国の皆様には暖かい御支援を賜った。厚く御礼申し上げます。
- 15 本書に先行して、上原E遺跡2022年度発掘調査の成果は「第35回東北日本の旧石器文化を語る会」で発表しているが、内容については本書が優先する。
- 16 本書の編集は青木が行った。

目 次

原色図版

序 文

例 言

目 次

第 1 章 調査の目的と経緯	1
第 2 章 遺跡の概要	2
第 1 節 遺跡の立地と自然的環境	2
第 2 節 歴史的環境	5
第 3 節 2000 年発掘調査成果と近年の関連研究の概要	8
第 3 章 2022 年度発掘調査の概要	11
第 1 節 調査の方法	11
第 2 節 調査の経過	12
第 3 節 基本層序	13
第 4 章 出土遺物	16
第 1 節 組成と空間分布	16
第 2 節 石器	17
第 5 章 自然科学分析	18
第 1 節 新潟県津南町上原 E 遺跡出土品の鑑定結果について	18
第 2 節 上原 E 遺跡における火山灰分析	24
第 6 章 考察	27
第 1 節 新潟県内出土片刃櫛器の集成	27
第 2 節 上原 E 遺跡出土櫛器の位置づけ	32
第 7 章 総括	37
引用文献一覧	38

実測図版
写真図版
報告書抄録
奥付

挿図目次

第2.1図 上原E遺跡周辺の地形・石材環境と後期旧石器時代～縄文時代草創期の遺跡	3	第5.1図 SEM-EDSによる試料の電子線像	18
第2.2図 津南段丘模式図	2	第5.2図 粒子#2スペクトル図	19
第2.3図 上原E遺跡2000年調査出土石器	9	第5.3図 粒子#4スペクトル図	20
第3.1図 本年度調査範囲と2000年調査区・遺物分布範囲の対応	11	第5.4図 粒子#5スペクトル図	21
第3.2図 調査区配置図	12	第5.5図 粒子#6スペクトル図	22
第3.3図 層序模式図	13	第5.6図 面分析スペクトル図	23
第3.4図 2022年度調査TP01～05セクション図	14	第5.7図 火山ガラスの屈折率	25
第3.5図 2022年度調査TP06～10セクション図	15	第5.8図 軽石及び火山ガラス	26
第4.1図 上原E遺跡出土遺物平面・垂直分布図	16	第6.1図 新潟県内出土片刃鏨器1	28
第4.2図 石器・縄の計測基準	17	第6.2図 新潟県内出土片刃鏨器2	29
		第6.3図 新潟県内出土片刃鏨器3	30
		第6.4図 長野県内出土片刃鏨器	33
		第6.5図 群馬県内出土片刃鏨器	34
		第6.6図 福島県内出土片刃鏨器関連資料	35

挿表目次

第2.1表 上原E遺跡周辺の遺跡	4
第4.1表 上原E遺跡出土遺物組成	16
第4.2表 上原E遺跡出土石器・縄属性表	17
第5.1表 粒子#2簡易定量値	19
第5.2表 粒子#4簡易定量値	20
第5.3表 粒子#5簡易定量値	21
第5.4表 粒子#6簡易定量値	22
第5.5表 面分析簡易定量値	23
第5.6表 テフラ分析結果	25
第6.1表 新潟県内出土の後期旧石器時代～縄文時代草創期の片刃鏨器	30
第6.2表 片刃鏨器の時期・地域別点数	31
第6.3表 片刃鏨器の時期・石材別点数	31

第1章 調査の目的と経緯

後期旧石器時代後半期の本州東北部においては、北海道から流入した、いわゆる「北方系細石刃石器群」が隆盛する。この主流となる細石刃製作技術、湧別技法はシベリアで発生した後に北東アジア・アラスカまで拡散したと想定されており、大陸と日本列島の関係性を明らかにするうえで非常に重要な研究対象となっている。特に、大陸から流入した後に北海道にて変化し本州へ南下したと考えられる湧別技法白滝型は、神子柴・長者久保石器群との共伴が検討されるなど、日本列島の新石器化をめぐる上でも注目される。

信濃川上流域、長野県との県境に位置する新潟県中魚沼郡津南町では、本ノ木遺跡や正面中島遺跡などに代表されるように、後期旧石器時代終末期から縄文時代草創期にかけての遺跡が多く確認されてきた。そうした中、国営農地再編事業にともない津南町教育委員会によって2000年に調査された上原E遺跡（佐藤ほか編 2018c）では、甲板面に擦痕をもつ黒曜石製細石刃核を主体とする白滝型細石刃石器群が検出された。局部磨製石斧関連資料も共伴したことから、細石刃石器群と神子柴・長者久保石器群との関連性を示唆する成果が得られ、整理作業段階から注目を集めていた（佐藤 2002、須藤 2009、佐久間 2015など）。また、細石刃石器群からやや離れて微隆起線文土器片も出土しており、共伴関係は明確でないが示唆深い資料と言える。

2018年に報告書（佐藤ほか編 2018c）が刊行された後には、各研究者による分析が加速した。筆者もその一人であり、黒曜石製石器の原産地分析及び細石刃製作技術の検討を行った。原産地分析からは、長野県和田岬産・秋田県男鹿産の他に北海道白滝産の黒曜石が持ち込まれていることを指摘し（青木・佐々木 2021、青木 2022）、細石刃製作技術の検討からは、これまで黒曜石製に限られるとしてきた白滝型細石刃核について、頁岩製細石刃核をもその範疇で捉えられることを指摘している（青木 2021）。近年には、このほか細石刃製作技術を中心とした研究が行われている（諸星 2022a・b）。これらの成果を踏まえ、2021年11月には「晩冰期・細石刃文化の資源利用」と題したシンポジウム（小菅ほか 2022）が津南町において開催されるなど、研究の動向が注目されている。

こうした現状のなか、2021年に新潟大学へ赴任しフィールドを求めていた筆者が津南町教育委員会の佐藤雅一氏に相談したところ、本遺跡の2000年調査範囲隣接地に遺物包含層が残存している可能性をご教示いただいた。佐藤氏らと現地の確認を重ね、調査可能であることを確認した筆者は上原E遺跡発掘調査団を組織し、津南町教育委員会の佐藤雅一氏・佐藤信之氏・長澤展生氏には調査指導・調査協力として本調査団に加わっていただいた。調査の目的として①遺物分布範囲の確認、②白滝型細石刃石器群の年代決定、③土器と細石刃石器群の共伴有無確認、④細石刃製作技術の検討に要する良好な接合資料の獲得を念頭に計画を立案し、2022年9月に発掘調査を実施した。

（青木要祐）

第2章 遺跡の概要

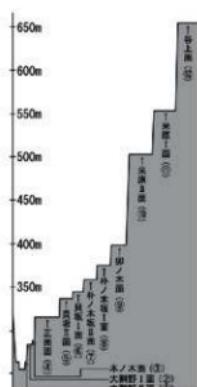
第1節 遺跡の立地と自然的環境

第1項 周辺の地形

上原E遺跡は新潟県中魚沼郡津南町大字上郷大井平に所在し、甲武信ヶ岳を水源とする信濃川の右岸に位置する（第2.1図）。遺跡の北方約2kmには信濃川が流れ、河床との比高差は約210mをはかる。西に約120m、比高差約60mの地点には馬界川が流れる。また、名水で知られる津南町には湧水地点が点在し、遺跡の東方約2kmには童ヶ窪が所在する。

信濃川右岸には西から志久見川、中津川、清津川の三つの支流がほぼ北に向かって流れ、信濃川に合流する。中魚沼郡はおよそ 200 万年前までに堆積した魚沼層と、その後に起った毛無山・鳥甲山の火山活動によって現在の地形の基礎が作られた。火山活動で形成された山岳地形の崩壊と浸食により、現在の高位段丘面には広大な扇状地が形成されていたと推測されている。その後、苗場山が 4 回にわたる活動を行い、そのうち 2 回目の活動の際に流れた溶岩が現在の高位段丘面を覆って流れを止めているとされる(佐藤 2016)。現在中津川右岸で観察されるような段丘は、上記の地形を中津川が大地を削りながら南西に向かってその流路を移動していく過程に、隆起が加わることで形成された(岡部 1985)。完新世以前に形成された段丘上にはローム層の堆積が見られ、古くに形成された高位段丘ではかなりの厚さでローム層が堆積している。

津南町では、信濃川とその支流の營力によって発達した河成段丘がみられる。津南段丘について岡部牧夫（1985）は、高位段丘面から、谷上面→米原面→卯ノ木面→朴ノ木坂面→貝坂面→正面面→大割野Ⅰ面と8つの段階に分類して紹介している。一方、佐藤雅一（2021）は、「考古学的区分として広域テフラ構成と標高の組み合わせ」によって、13面に分類しており、谷上面→米原Ⅰ面→米原Ⅱ面→卯ノ木面→朴ノ木坂Ⅰ面→朴ノ木坂Ⅱ面→貝坂Ⅰ面→貝坂Ⅱ面→貝坂Ⅲ面→正面面→本ノ木面→大割野Ⅰ面→大割野Ⅱ面としている（第2.2図）。本書では佐藤の分類を基準とする。上原E遺跡は13の段丘のうち米原Ⅱ面上の標高約462mに立地している。



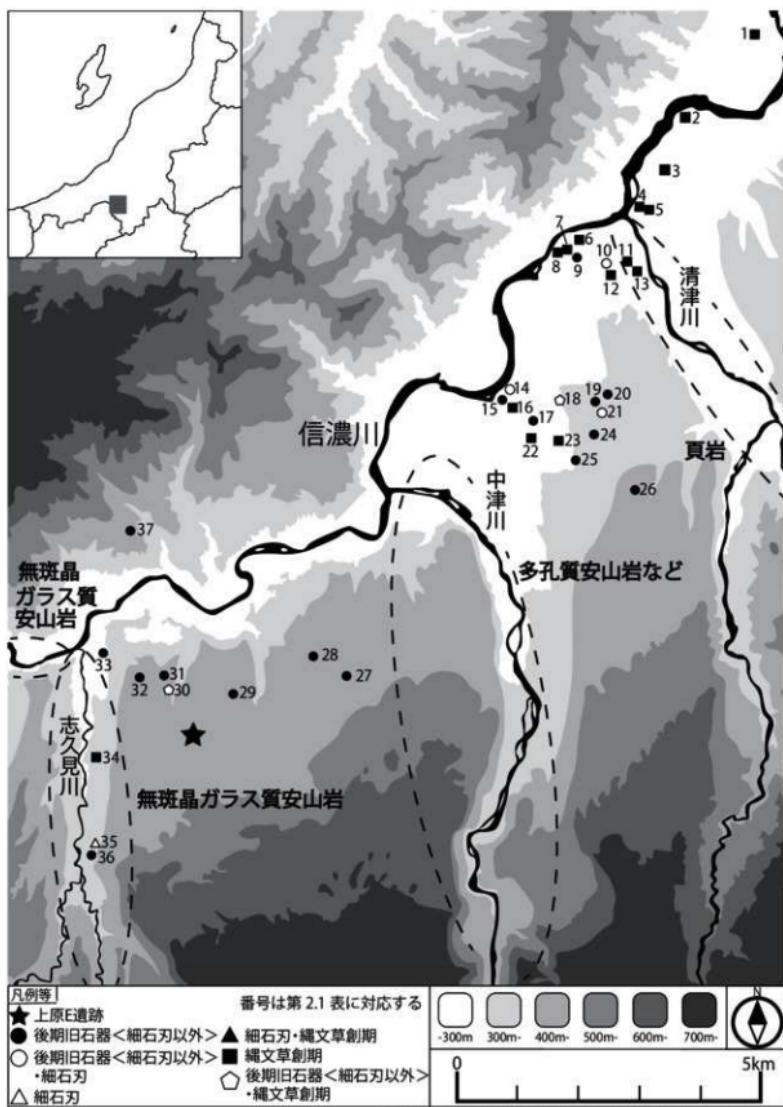
第22図 津南段丘模式図

(佐藤ほか編 2018c)

第2項 石材環境（第2.1図）

津南町とその周辺では、石器石材となり得る岩石の調査が度々行われており、付近の火山由来の岩石や堆積層由来の岩石が河原や露頭において獲得できることが確認されている（佐藤ほか編、2018c）。

信濃川流域の石材については、本遺跡の北西約4 km地点で信濃川に合流する支流の志久見川流域において、毛無山由来とされる無斑晶ガラス質安山岩が採取できる。水磨により外皮は平滑となり黒色ないし縞状を呈するもので、県境を越えた千曲川左岸にも分布が確認できる（中村 1986）。清津川上流部には七谷層相当の大沢層・葎沢層が分布し、芦食沢・研沢の流域の露頭や川原で頁岩が採取でき



る。その他、清津川流域では凝灰岩の分布も確認される。原石は痘痕状の外皮を持つものと水磨をうけて平滑なものがある。中津川流域では、多孔質安山岩などの安山岩類、ドレライトなどが分布している。他にも、魚野川沿いの湯沢町では黒色頁岩、十日町市を源流とし信濃川に合流する渋海川では頁岩が採取できる（塚原ほか 2021）。

あらかじめ 破開川周辺では黒姫洞窟遺跡の発掘調査に関連して石材の調査も行われており、石器石材に適した流紋岩、安山岩、チャート、頁岩、鉄石英などが採取できることが確認されている（魚沼地域洞窟遺跡発掘調査団編 2008・2017）ほか、黒曜石が支流の守門川、下ツクタキ沢で採集できる（塚原ほか 2021）。魚沼市の白崩沢では良質な碧玉や頁岩が確認されており、西川では黄玉が確認されている（塚原ほか 2021）。五十嵐川流域やその支流においては堀川正美・渋木宏人（2010）による調査で石器石材として使用可能な頁岩や珪質頁岩が採取できることが明らかにされた。その他、玉髓や鉄石英、流紋岩などが分布することが確認されている（塚原ほか 2021）。また、刈谷田川の流域では、玉髓や玉髓化した珪質頁岩、泥岩の存在が報告されている（中村 2007）。珪質頁岩は新潟県やその周辺においては「新潟県の新第三紀中新生の七谷層とその相当層に多く含まれている」（中村 1986）ため、その分布域においてよく確認される。

(野村郁仁)

第2.1表 上原E遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	時期	代表的な遺物	出典
1	久保寺南	縄文草創期	降伏縄文土器	佐藤・笠井編 2001
2	小丸山	縄文草創期	降伏縄文土器	佐藤ほか編 2018c
3	千瀬	縄文草創期（・細石刃）	降伏縄文土器・ホロカ技術による細石刃核	佐藤・石坂編 1994
4	壬	縄文草創期	降伏縄文・押伝縄文・爪形文土器・円孔文土器	小林編 1980～1983・1987、加藤編 2019
5	田沢	縄文草創期	降伏縄文・押伝縄文・爪形文土器・尖頭器・石鏃	能又編 2018
6	本ノ木	縄文草創期	押伝縄文土器・ハコ字爪形文土器を含む爪形文土器	谷口・酒澤編 2010, 谷口ほか編 2010,
7	卯ノ木	縄文草創期	爪形文・押伝縄文土器・尖頭器	岡本・佐藤編 2016
8	卯ノ木南	縄文草創期	爪形文・押伝縄文土器	佐藤・古谷編 1999
9	轍ノ木平	後期J1～J2（細石刃以外）	杉久保型サイフ形石器	佐藤ほか編 2018b
10	越那A	・細石刃群 （・縄文草創期）	ナイフ形石器・尖頭器・ホロカ技術による細石刃核、草創期の尖頭器1点	佐藤・石坂編 2004, 佐藤編 2017
11	鹿敷田田	縄文草創期（・細石刃）	降伏縄文土器・無文土器・荒尾型彫刻刀1点	中澤・江口編 1998, 菅沼 2004
12	堂原駅	縄文草創期	押伝縄文土器	佐藤ほか編 2018a
13	ヘツリ	縄文草創期	降伏縄文土器	佐藤ほか編 2018c
14	正面中島	後期J1～J2（細石刃以外） ・細石刃群	細石刃の群（泡別技術）・大型尖頭器石群	佐藤・佐野編 2002
15	正面ヶ原D	後期J1～J2（細石刃以外）	同部削製石斧・基部調整ナイフ形石器	佐藤ほか編 2001
16	堂尻	縄文草創期	降伏縄文土器	佐藤ほか編 2018c
17	道下	後期J1～J2（細石刃以外）	大頭器石群	佐藤ほか編 2021
18	貝坂洞ノ木平 ・B・D	後期J1～J2（細石刃以外） ・縄文草創期	D遺跡：尖頭器石群 B遺跡：縄文時代尖頭器石群	佐藤・石坂編 2002 佐藤・山本編 2006
19	中ツルニE	後期J1～J2（細石刃以外）	ナイフ形石器	村山・佐藤編 1997
20	神山	後期J1～J2（細石刃以外）	神山型彫刻刀形石器	村山・佐藤編 1997
21	小坂平	後期J1～J2（細石刃以外） ・細石刃	石刃・泡別技術による質貫製細石核	佐藤・宮田編 1999
22	寺田上A	縄文草創期	押伝縄文土器	佐藤ほか編 1998
23	堰下	縄文草創期	少量の重底下唇式土器	佐藤・石坂編 2002
24	下モ原I	後期J1～J2（細石刃以外）	杉久保型サイフ形石器・神山型彫刻刀形石器	佐藤・山本編 2000
25	別尻A	後期J1～J2（細石刃以外）	絞久保型サイフ形石器・神山型彫刻刀形石器	佐藤・山本編 2006
26	大原北I	後期J1～J2（細石刃以外）	ナイフ形石器	佐藤・新田編 2002
27	向原A・B・C	後期J1～J2（細石刃以外）	絞久保型サイフ形石器	佐藤・山本編 2005
28	谷内建設	後期J1～J2（細石刃以外）	神山型彫刻刀形石器・埴部削製加工のナイフ形石器	佐藤・山本編 2005
29	雨池A	後期J1～J2（細石刃以外）	ナイフ形石器・上唇型・神山型彫刻刀形石器・尖頭器	佐藤・山本編 2019
30	胴抜原B	・細石刃群	絞久保型サイフ形石器・神山型彫刻刀形石器。	佐藤・山崎編 2022
31	胴抜原A	後期J1～J2（細石刃以外） ・縄文草創期	40 cmほどの大型石刃・裏山型ナイフ形石器、小型彫刻刀形石器・爪形文土器	佐藤・山崎編 2015
32	西峰A	後期J1～J2（細石刃以外）	基部調整サイフ形石器	宮田編 2008
33	上・下	後期J1～J2（細石刃以外）	有極上唇器・細型彫刻刀・泡別技術	佐藤ほか 2019
34	北林C	縄文草創期	微隆起縫文土器	佐藤ほか 2011b
35	加用中東C	細石刃群	荒尾型彫刻刀1点・石刃や洞片など	佐藤ほか 2011a
36	加用中東A	後期J1～J2（細石刃以外）	国府石器群	佐藤ほか 2011a
37	飛沢D	後期J1～J2（細石刃以外）?	安山岩製のクリーヴィー	佐藤・石坂編 2003

断片的な資料のみが出土した時期はカッコ内に示す。第2.1図にはその他の主要な時期のみを示した。

第2節 歴史的環境

第1項 概観

本節では上原E遺跡周辺の遺跡について述べる。魚沼地域には後期旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡が集中し、その数は60を超える(信濃川火焔街道連携協議会編 2016、立木 2019など)。津南町周辺では、信濃川右岸の河岸段丘上に多くの遺跡が立地する(第2.1図、第2.1表)。特に、後期旧石器時代後半期の杉久保石器群や細石刃石器群、縄文時代草創期の遺跡は東北日本でも有数の数・規模を誇る。神山遺跡や荒屋遺跡といった標識遺跡のほか、本ノ木論争の舞台となり田沢・壬遺跡とともに国指定史跡となった本ノ木遺跡に代表されるように、学史上欠くことのできない地域と言える。

津南町教育委員会による本遺跡2000年調査の成果については次節で述べるが、後期旧石器時代終末期に位置付けられる白滝型細石刃石器群と、縄文時代草創期に位置づけられる微隆起線文土器片が出土している(佐藤ほか編 2018c)。そこで、本節では津南町を中心として後期旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡をまとめる。なお、2000年調査出土資料の主体をなす細石刃石器群に重点を置くため、以下では細石刃石器群を除いた後期旧石器時代の遺跡、細石刃石器群の遺跡、縄文時代草創期の遺跡の3項に分けて述べる。

(青木要祐)

第2項 後期旧石器時代(細石刃石器群を除く)

本項では、信濃川をはじめ周辺を流れる河川を目安に地域を細分したうえで、おおよそ時間の流れにそって上原E遺跡の周辺遺跡を概観する。

まず、志久見川右岸～中津川左岸にかけての地域の遺跡を主に西から東へと記述する。まず、志久見川流域には、国府系石器群をともなう加用中条A遺跡(佐藤ほか 2011a)や、有櫛尖頭器や「細原型」とされる彫刻刀形石器が発見されたしぐね遺跡(佐藤ほか 2019)がある。より標高が高い高位段丘面(標高約400m～)は「中子原」とよばれ、上原E遺跡もここに立地する。中津川右岸地域の段丘面と対比するならば、米原II面となる。この地域には竜ヶ窪など多くの湧水地点とともに、国営農地再編整備事業にともなう発掘調査によって多くの遺跡が確認されている。東山石器群を主体とする胴抜原A遺跡では最大40cmほどの大型石刃や、黒曜石製のナイフ形石器などが出土している(佐藤・山崎編 2015)。基部調整を持つナイフ形石器が出土した洗峰A遺跡(宮田編 2008)、神山型彫刻刀形石器及び端部斜断加工のナイフ形石器が出土した谷内堀沢遺跡、向原遺跡群(佐藤・山本編 2005)などもある。時代が下り、胴抜原B遺跡では杉久保型ナイフ形石器・神山型彫刻刀形石器が確認される(佐藤・山崎編 2022)。このような状況で、雨池A遺跡では二側縁加工ナイフ形石器と神山型・上げ屋型彫刻刀形石器を組成する(佐藤・山本編 2019)。このうち細石刃石器群へと移行する。

次に、中津川右岸～清津川左岸にかけての地域について記述する。津南周辺で最も古いとされるのが正面ヶ原D遺跡である。正面面に位置し、基部調整を施したナイフ形石器や局部磨製石斧を中心とした組成で、AT層下位に包含されている(佐藤ほか編 2001)。大原北I遺跡は二次加工が施された石刃を持ち、小規模な遺物集中部を5か所形成して米原II面に立地する(佐藤・新田編 2002)。杉久保石器群が隆盛する時期になると、遺跡が特に多く確認されるようになる。貝坂I・II面には、杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器を特徴とする楕ノ木平

遺跡（中村 1961、大場ほか 2014）・居尻A遺跡（佐藤・山本編 2006）がある。杉久保型ナイフ形石器・彫刻刀形石器が出土した下モ原I遺跡（佐藤・山本編 2000）や神山遺跡は朴ノ木坂面にある。他にも杉久保型ナイフ形石器や尖頭器が出土した中ツルネII遺跡（村山・佐藤編 1997）なども存在している。このうち、居尻A遺跡と下モ原I遺跡では遺跡間接合もみられ、特筆すべき点と言える（佐藤・山本編 2000）。尖頭器石器群の遺跡として貝坂II面には道下遺跡、貝坂I面には貝坂桐ノ木平D遺跡、貝坂面に対比される段丘面上に越那A遺跡がある。越那A遺跡では細石刃核も出土している（佐藤編 2017）。このほか、近年一部資料が報告された「廣田永二コレクション」には、採集地点が不明瞭とされるものの釜堀川東遺跡採集資料に杉久保石器群及び尖頭器石器群関連資料が含まれる（津南町教育委員会文化財班 2021）。

上記で述べてきたように細石刃石器群以外の後期旧石器時代遺跡は、信濃川右岸に集中している。信濃川左岸では飛沢D遺跡が確認されているものの、遺跡数は少ないと考えられている。

（松本航太）

第3項 細石刃石器群

信濃川と魚野川の合流地点に位置する長岡市（旧川口町）荒屋遺跡をはじめ、魚野川流域には魚沼市（旧堀之内町）月岡遺跡、さらに上流に行くと南魚沼市（旧六日町）上ノ台I遺跡・湯沢町大刈野遺跡も所在する。信濃川本流では十日町市愛宕山遺跡・千溝遺跡、上流へさかのぼって津南町に入ると、越那A遺跡、小坂平遺跡、正面中島遺跡、釜堀川東遺跡がある。

荒屋遺跡はホロカ技法と湧別技法札滑型による細石刃核を有し、荒屋型彫刻刀が多出する（芹沢・須藤編 2003）。月岡遺跡は札滑型と幌加型の2種の細石刃核を有し荒屋型彫刻刀が共伴する一方、少量ながら非荒屋型のものも出土する（中村・小林 1983、桑原 2022）。上ノ台I遺跡では札滑型の細石刃核を含む細石刃石器群と大型尖頭器石器群の二つの石器群の遺物が確認されている（佐藤 1986・2019b、小熊・立木 2017）。大刈野遺跡では白滝型・札滑型の細石刃核を含む細石刃石器群と大型尖頭器石器群が確認されている（佐藤編 1988、佐藤 2019a）また、幌加型細石刃核なしホロカ技法を含むという記述もみられる（佐藤 2018、桑原 2022）。正面中島遺跡（佐藤・佐野編 2002）では、札滑型と推察される細石刃核原形とそのスボール、荒屋型彫刻刀など細石刃石器群のほか、大型尖頭器石器群も確認されている。両石器群とも浅間草津火山灰（As-K）を含む層から出土しているが、薄い堆積層、重複しない分布域、母岩を共有しない点などから時期差を想定する評価がなされた（佐野 2002）。一方で、両者の時期差に慎重な姿勢をとる見解もみられる（佐藤雅 2020・2021）。

愛宕山、千溝、越那A、小坂平、釜堀川東の5遺跡ではそれぞれ細石刃石器群に属すると考えられる遺物が単独で出土している。愛宕山遺跡（十日町市史編さん委員会 1996、菅沼 2003）は頁岩製の舟底形石器が1点、千溝遺跡（佐藤・石坂編 1994）では頁岩製の幌加型細石刃核と考えられるものが1点出土している。越那A遺跡（佐藤編 2017）でも同じく幌加型と思われる非在地系珪質頁岩製の細石刃核が1点、小坂平遺跡（佐藤・宮田編 1999）では湧別技法の頁岩製細石刃核が1点、釜堀川東遺跡（広田・中澤 1994）では珪質頁岩製の荒屋型彫刻刀が1点確認される。

上記に挙げた魚沼地域の細石刃石器群では、珪質頁岩が主要石材である。一方、上原E遺跡の2000年発掘調査（佐藤ほか編 2018c）では、頁岩に加えて黒曜石を主要石材とする細石刃石器群が出土している。周辺遺跡と比較すると、使用石材が特徴的と言える。（野村郁仁）

第4項 繩文時代草創期

微隆起線文土器を含む縄文時代草創期の遺物が出土している遺跡には、近隣の志久見川流域に北林C遺跡や胴抜原B遺跡が存在する。このほか、隆起線文系土器が出土している遺跡には、清津川以北に分布する久保寺南、小丸山、干溝、壬、田沢遺跡、そして中津川以北～清津川以南の地域に分布する屋敷田Ⅲ、ヘツリ、堂尻遺跡がある。

北林C遺跡においては、局部磨製石斧などとともに微隆起線文土器が57点発見されており、第一群土器として報告されている（佐藤ほか 2011b）。微隆起線文は横位施文のほか、縱位施文、斜位施文のものも確認される。同じく志久見川流域に位置する胴抜原B遺跡においては、粘土紐を貼り付けた後、箆状工具を使って調整する方式による微隆起線文土器がみられる（佐藤・山崎編 2022）。

屋敷田Ⅲ遺跡においては縄文時代から古墳時代までの土器が出土しており、その半数が縄文時代草創期のものである。出土した縄文時代草創期の土器には、微隆起線文土器を含む隆起線文系土器のほか無文土器もあり、それぞれ施文の様式からいくつかに分類される（中澤・江口編 1998）。また、石匙なども隆起線文土器にともなって出土している。

清津川以北に位置する田沢遺跡では、1968年の芹沢長介による調査の際に、草創期に属する土器片が284点出土している（鹿又編 2018）。出土した土器片には、器面に太い直線状の粘土紐を貼り付けて、装飾を施す形式のもの、波状の細い隆起線が施される形式のもののが、無文のものもみられる。無文のものには、前述の二つの形式の無文帶の破片と考えられるものに加えて、出土地点の関係から無文土器の破片と考えられるものも含まれている。また、第2次から第10次調査の間に縄文時代草創期から中期にかけての土器が多数出土している（加藤編 2019）。内訳では縄文時代草創期のものが最も多く、他の時期のものは非常に少ない。加えて、土器は隆帯文と細隆起線文土器が特徴的であるとされる（加藤編 2019）。田沢遺跡とともに清津川以北に位置する壬遺跡では、縄文時代草創期から後期以降までの幅広い期間の土器が出土している。その中でも特に縄文時代草創期前葉から後葉にかけての土器と石器が9千点ほど出土しており、微隆起線文土器や爪形文土器の他に、円孔文土器がまとまって発見されていることが特徴である（小林編 1980・1981・1982・1983・1987）。円孔文土器については、アムール川流域に位置するグロマトウハ遺跡から類似する資料が出土しており、沿海州との関係性が考察されている（佐藤・渋谷 2014）。上記のほか、久保寺南遺跡では千点以上の隆起線文系土器群が確認されている（佐藤・笠井編 2001）。

そのほか縄文時代草創期に位置づけられる土器には、隆起線文期以前に無文土器を含む土器出現期の土器が、隆起線文期以降に爪型文や押引文、押圧縄文土器、そして室谷下層式土器に代表される回転縄文土器段階のものがある。ただし、回転縄文土器段階の資料は津南町近辺では少なく、堰下遺跡で室谷下層式土器が少量見つかっているのみである（佐藤・石坂編 2002、谷口・深澤編 2010）。

爪形文土器が出土している遺跡には、本ノ木遺跡や卯ノ木遺跡、卯ノ木南遺跡などが存在している（佐藤ほか編 2018c）。そのうちの本ノ木遺跡では、爪形文土器だけでなく、ハの字爪形文土器も見つかっている（谷口・深澤編 2010）。ハの字爪形文は器面をつまんで施すため、ハの字間は盛り上がっている。卯ノ木遺跡ではハの字爪形文土器が見つかっており、それらは文様の施文方向からいくつかに区分できる（佐藤・古谷編 1999）。これらに加えて、胴抜原A

遺跡からは草創期前半期に属する爪形文土器が出土しており、その文様の特徴として、刺痕形状の湾曲部がD字状なっていることが挙げられる（佐藤・山崎編 2015）。文様は、人差し指の爪を用いて背面施したものと考えられている。

押引文土器は、前述の本ノ木遺跡からも出土しており（加藤編 2019）、これ以外では寺田上A遺跡から出土している。寺田上A遺跡で出土した押引文土器は、押引文が口縁部直下に二条一帯で横走し、そして上段から下段へ、左から右の順に施されている（佐藤ほか編 1998）。また、卯ノ木南遺跡でも、上から下へ削して引く押引文土器が出土している（佐藤ほか編 2018b）。押圧縄文土器は、前述の本ノ木遺跡や卯ノ木南遺跡のほか、堂屋敷遺跡からも出土している。そのうち本ノ木遺跡では、押圧縄文と爪形文とが同一個体の破片に施されるものも発見されている（谷口ほか編 2010）。また、堂屋敷遺跡では、草創期後半に帰属する押圧縄文土器が出土している（佐藤ほか編 2018a）。

このほか、縄文時代草創期に属するとされる石器が出土している遺跡には、当該期の石槍が1点出土している越那A遺跡や、本ノ木遺跡出土のものに類似する形態を示す尖頭器が発見されている別当A遺跡がある（佐藤・山本編 2003、佐藤・石坂編 2004）。この他、貝坂桐ノ木平B遺跡でも草創期に帰属する石器群が見つかっている（佐藤・石坂編 2002）。（岩野 輝）

第3節 2000年発掘調査成果と近年の関連研究の概要

第1項 調査・報告の経緯

上原E遺跡は国営農地再編整備事業にともない、2000年に津南町教育委員会によって発掘調査が実施された。同年に発行された概報（山本 2000）において、擦痕をもつ細石刃核や石斧調整剥片の存在が示された。後期旧石器時代終末期に特徴的な白滝型・幌加型細石刃核と神子柴・長者久保石器群に代表される局部磨製石斧が潜在的に共存していたという重要性から、複数の論考（佐藤 2002、須藤 2009、佐久間 2015など）で言及されてきた。そして、2018年には調査報告書が刊行された（佐藤ほか編 2018c）。

第2項 器種組成・石器製作技術

報告書によれば、上原E遺跡の調査区はA・Bの2地区に分けられ、うちA地区から2つの石器集中部が確認されたとされる。ただし、層位の出土状況や石材組成・石器組成をもとに2つの石器集中部は同時性が高いとされる。器種としては前述の細石刃核・石斧調整剥片のほか、細石刃・尖頭器・彫刻刀形石器などが出土している。

細石刃核は主に湧別技法とホロカ技法によって製作される。プランクを除けば細石刃核は20点出土しており、黒曜石製が12点を占める。うち6点が湧別技法白滝型、5点が幌加型に分類できる（第2.3図1・2）。また、残る1点は湧別技法によるファーストスボールの端部から細石刃が剥離されたと考えられるもの（同図4）で、筆者らが実施した原産地分析において北海道白滝産と判別された（青木・佐々木 2021）。そして、本遺跡の細石刃核最大の特徴は黒曜石製細石刃核のうち10点の打面に擦痕が施される点にある。甲板面・打面の擦痕は湧別技法白滝型に特徴的な製作技術の痕跡だが、本遺跡では幌加型細石刃核にも施される。同様の事例は少なく、北海道元町2遺跡や山形県湯の花遺跡などに限られる（鶴丸編 2008、加藤ほか

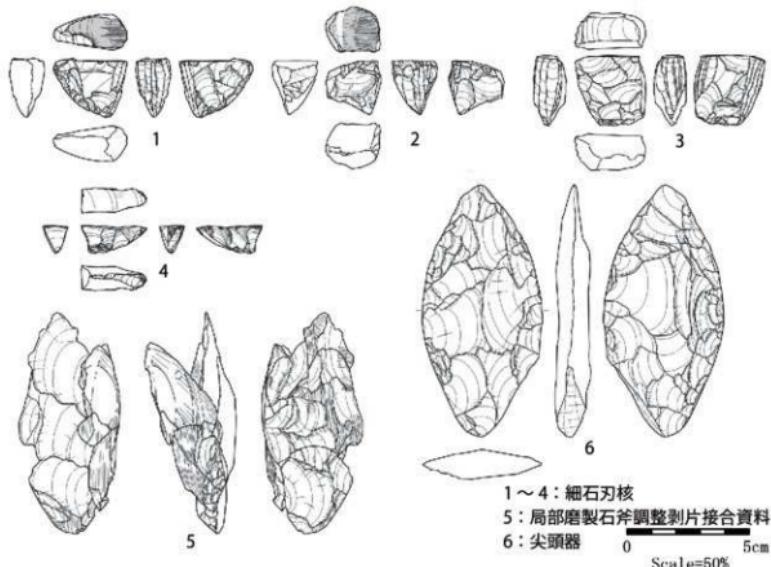
1982)。このほか、「硬質頁岩」や凝灰岩、鉄石英製の細石刃核が8点出土しており、主に湧別技法・ホロカ技法によって製作される。湧別技法による「硬質頁岩」製細石刃核(同図3)は、報告書等で札滑型とされているが、筆者は当該資料について「頁岩資源が豊富な本州東北部における「白滝型」のバリエーションの可能性」(青木 2021)を指摘している。また、諸星良一は剥片素材の細石刃核について岬下型細石刃核と捉える見解を示している(諸星 2022a)。

細石刃核の他には局部磨製石斧の接合資料や両面加工の尖頭器が特徴的な遺物として挙げられる(同図5・6)。いずれも神子柴・長者久保石器群を想起させるもので、類似する共伴事例としては、宮城県薬葉山No.34遺跡で確認された白滝型細石刃核・局部磨製石斧・両面加工尖頭器の事例がある(宮城旧石器研究会 2014)。同遺跡は後期旧石器時代終末期に位置付けられ、北方系細石刃石器群と神子柴・長者久保石器の共存と示すものと評価されている(佐久間 2018)。本遺跡の細石刃石器群も、細石刃核の製作技術・共伴する石器の特徴から同時期に位置付けられるものと筆者は捉えている。

なお、本遺跡では石器集中部から約15m離れた地点で微隆起線文土器の破片が単独で1点出土しているとされる(佐藤ほか編 2018c)が、細石刃石器群との関連は明らかでない。

第3項 使用石材

出土した8,945点の石器は、黒曜石が44%(3,940点)、「硬質頁岩」が38.2%(3,417点)を占める。そのほかには凝灰岩や無斑晶ガラス質安山岩、鉄石英、チャートなどが含まれる。



第2.3図 上原E遺跡2000年調査出土石器(佐藤ほか編 2018c)

このうち黒曜石・チャートが非在地石材、その他が在地石材とされ、後者で約51%を占める。黒曜石は細石刃関連資料の他、トゥールにも使用される。

本遺跡出土黒曜石製石器の一部は、建石徹によって蛍光X線分析装置を用いた原産地分析が既に行われている。分析された16点のうち13点が長野県「小深沢」、3点が秋田県「脇本」とされている（佐藤 2003、佐藤 2018）。筆者らはこれらの試料を含めた黒曜石製石器165点の原産地分析を実施し、127点が長野県和田岬産、37点が秋田県男鹿産、1点が北海道白滝産と判別している（青木・佐々木 2021、青木 2022）。

黒曜石に次いで多い「硬質頁岩」は、同地域で詳細に行われた石材調査（佐藤信之 2021、塚原ほか 2021など）をもとに、東北地方由来のものではなく、凝灰岩や無斑晶ガラス質安山岩と合わせて在地石材とされている（佐藤ほか編 2018c）。在地石材の中では、硬質頁岩や凝灰岩が原石で搬入されたと考えられる一方、遺跡から約3km地点で採取可能な無斑晶ガラス質安山岩は剥片・石刃のみ出土しているため遺跡内での剥片剥離は行われなかつたとされている（佐藤ほか編 2018c）。

第4項 遺跡の年代・古環境

11点の試料を対象としてAMSによる¹⁴C年代測定が行われた。うち2点が後期旧石器時代後半の年代（ $16,100 \pm 50$ yrBP (IAAA-121273)、 $16,190 \pm 50$ yrBP (IAAA-121274)）を示し、この2点についてはトウヒ属バラモミ節と樹種同定されたほか、 $12,330 \pm 40$ yrBP (IAAA-121277)を示した炭化物がトネリコ属とされた（パリノ・サーヴェイ株式会社 2018）。ただし、報告者の佐藤らは他遺跡の様相と比較検討し、これらの¹⁴C年代の積極的な採用はしていない（佐藤ほか編 2018c）。

また、火山灰分析によってⅢ層最上部（Ⅲ 1層最上部）から「浅間一草津火山灰（As-K）」、Ⅲ層最下部（Ⅲ 3層最下部）から「姶良一丹沢火山灰」が同定されている（大塚ほか 2018）。遺物はⅢ層直上のⅡ b層からⅢ層にかけて出土していることから、As-Kに前後する可能性が想定される。

（青木要祐）

第3章 2022年度発掘調査の概要

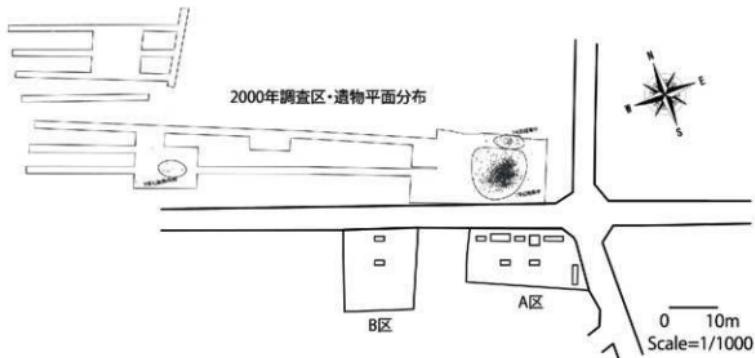
第1節 調査の方法

本調査では、間に耕作地を挟んで約11m離れた大井平5474-1・5475-2の休耕地2区画を調査範囲とした。いずれも2000年調査範囲の南方約10mに位置する（第3.1図）。調査中は便宜的に東に位置する5474-1をA区、西に位置する5475-2をB区と呼称した。本書でもこれに準ずる。本調査では㈱シン技術コンサルよりレンタルしたトータルステーションにて測量を行い、ESRI製GISソフトウェアArcGISで作図した。

調査の主目的が遺物分布範囲の確認であったため、1m×2mを基本とするトレーナーを10か所設定し、出土状況等に応じて順次拡張を行うこととした。道路上に座標(0,0)の仮原点（杭A）を設定し、そこから南に22A1(-1,0)、22A3(-3,0)、22A5(-5,0)、22A7(-7,0)、22A11(-11,0)の杭を設定した。ここで座標の方位は任意である。これらを基準としてA区内にTP01～04及びTP06～09のトレーナー8か所を設定した。各トレーナーは原則1m×2mとしたが、進行状況や遺物の出土状況に応じて拡張し、最終的にTP01は2m×2m、TP02は1.5m×4m、TP07及びTP08は1m×4mとなった。なお、杭Aの標高は461.840mである。B区内においては杭A(0,0)から西32mの地点に22B0(0,-32)を設定し、そこから南に22B1(-1,-32)、22B3(-3,-32)、22B5(-5,-32)、22B7(-7,-32)の杭を設定した。これらを基準としてB区内にTP05・TP10のトレーナー2か所を設定した。いずれも1m×2mで、A区と合わせると10トレーナー、総面積は30m²となった（第3.2図）。

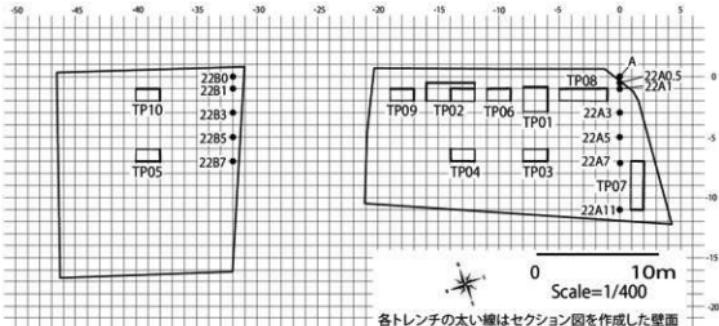
各トレーナーは表土除去後、2000年調査での出土状況から細石刀石器群の遺物包含層と想定されるIIIa層を中心に精査を行い、おおむねIIIb層で完掘とした。分層及びセクション図作成、各種測量を行った後に埋め戻した。適宜写真撮影も実施している。また、TP02・TP03では地表下約120cmのVI層までの深掘区を設け、土壤サンプルを各層から採取した。掘削・埋め戻しは全て人力で行い、出土遺物は基本的にトータルステーションによって三次元座標を記録して取り上げた。

（宮島龍志・山田 淩・青木要祐）



第3.1図 本年度調査範囲と2000年調査区・遺物分布範囲の対応

（2000年調査区・遺物平面分布は佐藤ほか編 2018cを加工）



第3.2図 調査区配置図

第2節 調査の経過

期間：2022年9月10日～9月19日（10日間）

調査担当：青木要祐（新潟大学人文社会科学系・助教）

調査指導：佐藤信之氏（津南町教育委員会）

調査協力者：佐藤雅一氏・長澤展生氏（津南町教育委員会）

調査員：森 貴教（新潟大学研究推進機構超城学術院・助教）

遠藤純夏・大島早紀・野村郁仁・原田優海・宮島龍志・松本航太・岩野 輝・笠原博

雅・中村隆人・南村鷹弥・斎内俊樹・山田 澄・木野恵吾（新潟大学人文学部・学生）

調査面積：計 30 m²

調査に先立って9月4・6・9日には草刈り・器材搬入・調査区設定を行った。初日10日にA区にてTP01～04の掘削を開始し、翌11日には地表から深さ約30～40cmにてローム層であるIII a層を検出し、検出面を撮影した。10・11日にかけてOGの阿部紀佳氏（長野市教委）、11日に佐藤信之氏（津南町教委）来跡。12日には堆積状況確認のため、TP02・03で深掘区を設けた。これらは最終的に14日の時点で深さ120cmまで掘削し、VI層まで層序の確認を行った。この際、TP02深掘区の北西隅深さ約60cmのIII b層下部にて礫器を検出した。後日、両深掘区において土壤サンプルを採取している。13日には佐藤雅一氏・佐藤信之氏（津南町教委）が来跡され、堆積状況等についてご教示いただく。同日にTP01・03・04をIII b層上面まで掘削して細石刃石器群が出土しないことを確認し、完掘とした。これ以降に掘り下げたその他のトレンチも基本的におおむねIII b層中で完掘としたが、III b層下部にて礫器が出土したTP02は深掘区以外でもIII c層中まで掘り下げて完掘とした。完掘したトレンチは作図・撮影の後、順次埋め戻している。

14日にはB区にてTP05、A区にてTP06・07の掘削を開始した。岩瀬彬氏（東京都立大学）

と同大学及び早稲田大学の学生ら来跡。16日にはTP02で検出した礫器の取り上げと遺物分布範囲確認のため、TP02を1.5m×4mに拡張した。しかし、その後TP02から他の遺物は出土していない。同日16日にはTP08の掘削を開始し、II層上面にて直径70cmの黒色土のまとまりを認めたが、半裁して土層を観察した結果、遺構ではなく擾乱と判断した。長崎潤一氏（早稲田大学）、長沼正樹氏（魚沼市教委）、阿部敬氏（十日町市教委）来跡。17日にはTP08のII層からハンマーストーンが1点出土した。沢田敦氏（新潟県）、吉井雅勇氏（村上市教委）来跡。18日にはA区にてTP09、B区にてTP10を新設し、掘削した。B区のTP10ではII層が確認できず、IIIa層も大きく擾乱を受けていることから、B区では細石刃石器群の包含層が失われていると考えられた。諸星良一氏（東京航業研究所）来跡。17・18日にかけて調査区から北東に約1.2km離れた4等三角点「北原」を視準し、杭Aの標高を算出した。最終日19日には残るトレチの完掘・作図・撮影を行い、埋め戻した後に撤収した。

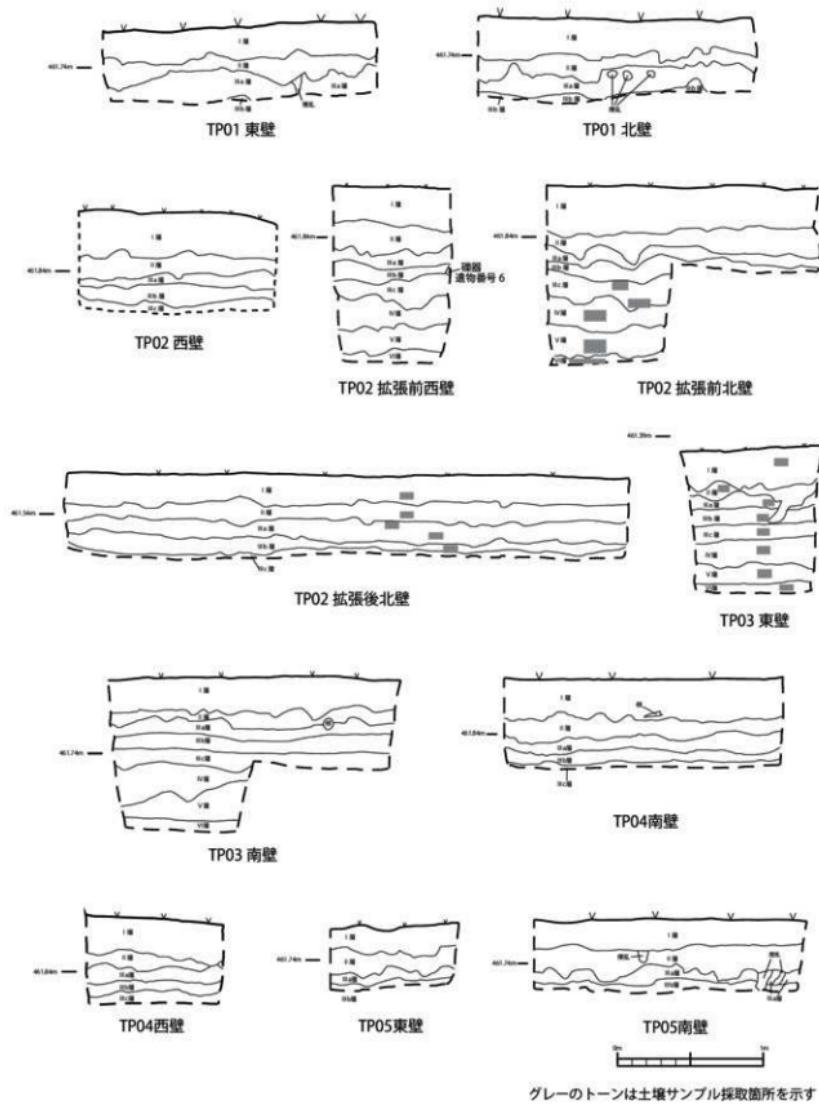
(大島早紀)

第3節 基本層序

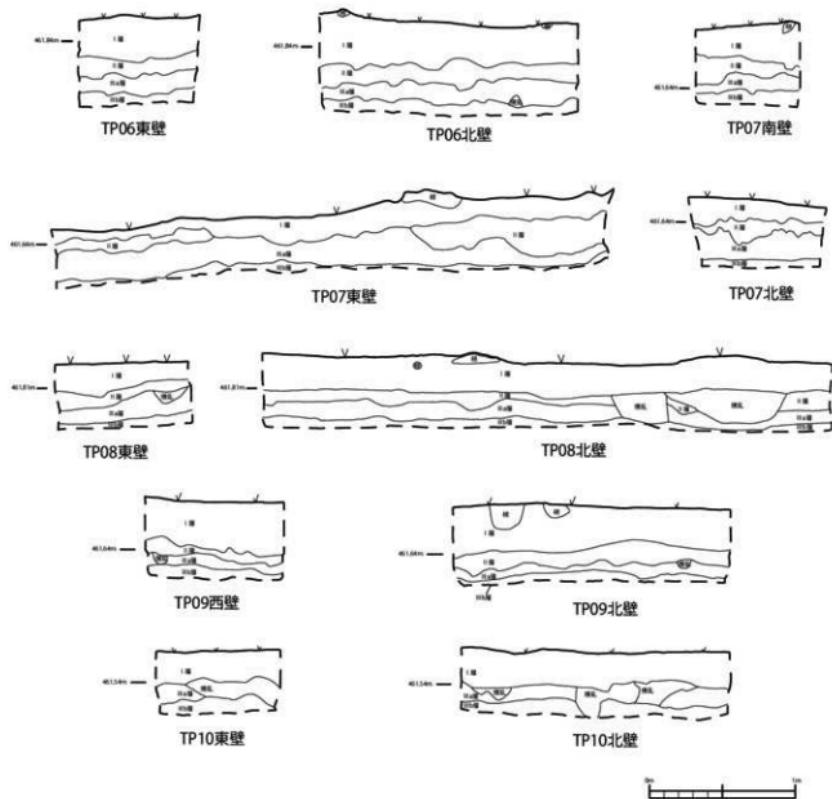
遺跡の基本層序は以下の通りとなる。一部呼称が異なるものの、基本的には2000年調査の層序（佐藤ほか編 2018c）と同様である（第3.3～5図）。

I層	表土。黒色土。直径10mm程度のロームのブロックが混ざる。厚さ約20cm。
II層	漸移層。黒褐色シルト。厚さ約7cm。2000年調査区のII b層に相当か。
IIIa層	ローム層。黄褐色シルト。
IIIb層	2000年調査区のIII 1層に相当か。最上部にAs-Kを含むとされ（大塚ほか 2018）、細石刃石器群遺物包含層の中心とされる。厚さ約8cm。
IIIc層	ローム層。黄褐色粘土質シルト。2000年調査区のIII 2層に相当か。厚さ約10cm。
IV層	ローム層。黄褐色粘土質シルト。2000年調査区のIII 3層に相当か。最下部にATの降灰ピークがあるとされる（大塚ほか 2018）。厚さ約10cm。
V層	ローム層。黄褐色粘土質シルト。III c層より粘性が強い。厚さ約5～25cm。
VI層	ローム層。黄褐色粘土質シルト。しまり・粘性が最も強い。厚さ約13cm。
	ローム層。黄褐色粘土質シルト。V層より少し軟らかい。A区東半では橙色を主体に白や黒、青みがかった灰色の粒を含む10～20mm程度の大きさのブロックを少量含む。

第3.3図 層序模式図



第3.4図 2022年度調査TP01～05セクション図



第3.5図 2022年度調査TP06～10セクション図

各トレンチ南壁または北壁のセクション図は可能な限りX=-1及び-7ラインで揃えて作成した（第3.2・4・5図）。TP02北壁は深掘区を含む拡張前（X=-1）と拡張後（X=-0.5）の2面で作成している。全体的な傾向としては、A区のTP01～04及びTP06～09よりも、B区のTP05・10では細石刃石器群包含層のIIIa層が薄く、耕作や搅乱の影響を受けている様子がうかがえる。

（笠原博雅・大島早紀・青木要祐・森 貴教）

第4章 出土遺物

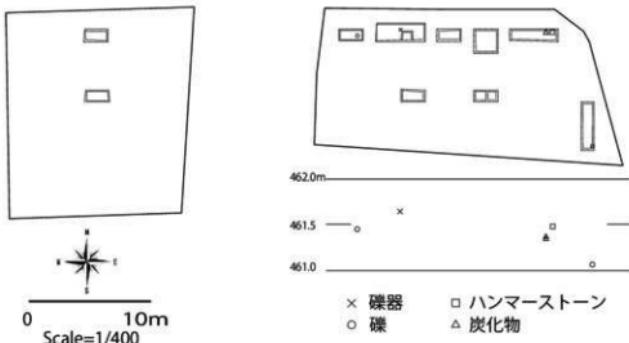
第1節 組成と空間分布

本調査では、ハンマーストーン1点と礫器1点、計2点の礫石器が出土した（第4.1表）。剥片石器は出土していない。他に礫（安山岩）3点、炭化物2点を取り上げた。ただし、炭化物2点はいずれもTP08の擾乱からの出土であり、他の遺物にともなうものではない。TP07の礫1点を除くと、遺物は全て2000年調査区に比較的近いA区の北側より出土している。出土した石器2点は出土層位が異なり、いずれも単独での出土である。B区に設定したTP05・10からは遺物が出土しなかった。

礫器はTP02の中央のIII b層下部より出土しており、出土位置は、第5章第2節及び2000年調査報告書の火山灰分析（大塚ほか 2018）でAs-Kの降灰層準と推定されたIII a層上部から10cm、ATの降灰層準の上限と推定されたIII c層下部から14cm離れている。TP02拡張前に深掘区北西隅で器面の一部が検出されたため、TP02拡張前西壁セクション図に書き入れている（第3.4図）。ハンマーストーンはTP08の北東側II層下部より出土している。礫はTP01の東側1層から1点（グリッド上げ）、TP07の南東側III a層から1点、TP09の南東側III a層から1点が出土している（第4.1図）。（宮島龍志・山田 澤）

第4.1表 上原E遺跡出土遺物組成

層位	礫器	ハンマー ストーン	礫	炭化物	総計
I層		TP01 1		1	
擾乱			TP08 2	2	
II層		TP08 1		1	
III a層			TP07 1	2	
III b層	TP02 1				1
総計		1	1	3	7



第4.1図 上原E遺跡出土遺物平面・垂直分布図

第2節 石器（第4.2表）

出土遺物の計測基準は第4.2図に示す。

第1項 ハンマーストーン（実測図版1-1）

1点がTP08のII層下部から出土した。安山岩の亜角礫を素材としたもので、下部に敲打痕が認められる。正面上面は部分的に欠けている。出土層位としては2000年調査の白滝型細石刃石器群に近いが、帰属時期には検討を要する。長さ71.71mm、幅59.69mm、厚さ45.49mm、重さ214.96g。

（松本航太）

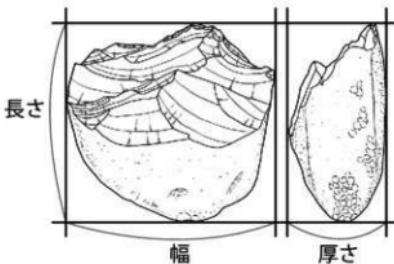
第2項 碓器（実測図版1-2）

1点がTP02のIIIb層下部から出土した。シルト岩のやや扁平な亜円礫を素材とし、片面加工で刃部が整形される、いわゆる片刃礎器である。素材となった石材は互層を成しており、末端がステップ様となる剥離が重なっていることから、ある程度リダクションを経た状態と考えられる。器体正面中央に残る比較的古い剥離面からは、やや離れた打点から剥離されている様子がうかがえるため、素材となった原石は少なくとも残存長の倍程度はあったものと想定される。刃角は35～45°で、刃部には数mm程度の細かな剥離が連なる。特に刃部右半は密集した剥離によって潰れている。使用によって生じたものと考えられるが、ボリッシュ・線状痕は確認できていない。

大きく残された自然面の底縁・側縁には敲打痕のような痕跡がみられるが、人為的な痕跡のほか河川等での運搬作用によって残った痕跡の可能性がある。出土したIIIb層はAs-K(IIIa層上部)とAT(IIIc層以下)の間層にあたることから、両火山灰の降灰間に相当するものと想定される。長さ80.94mm、幅83.64mm、厚さ38.24mm、重さ298.03g。（野村郁仁・青木要祐）

第4.2表 上原E遺跡出土石器・礎属性表

遺物番号	地区名	層序	器種・種別	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	実測図版
1	TP07	III a	礎	安山岩	30.06	14.96	12.84	5.55	
4	TP08	II	ハンマーストーン	安山岩	71.71	59.69	45.49	214.96	1-1
5	TP09	III a	礎	安山岩	37.93	33.01	15.98	18.04	
6	TP02	III b	礎器	シルト岩	80.94	83.64	38.24	298.03	1-2
グリッド上げ	TP01	I	礎	安山岩	55.25	33.91	16.10	27.87	



第4.2図 石器・礎の計測基準

第5章 自然科学分析

第1節 新潟県津南町上原E遺跡出土品の鑑定結果について

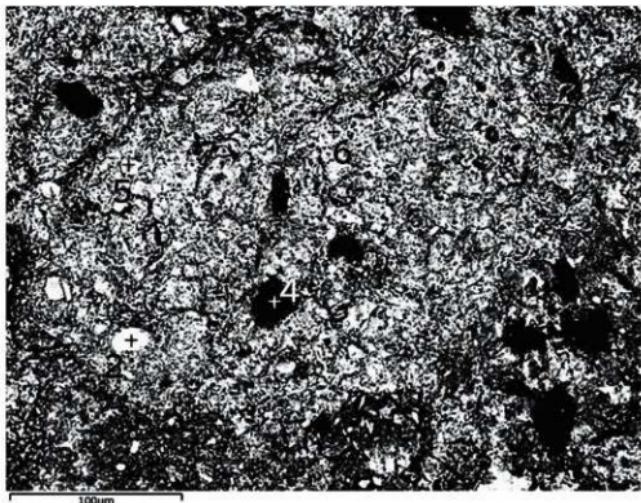
高澤栄一（新潟大学理学部）

1. 分析方法

岩石片（上原E遺跡出土器：遺物番号6）の表面の微小領域（5 mm × 5 mm）に炭素蒸着を行い、エネルギー分散型検出器（EDS：Oxford AZtec Energy x-Act）付き走査電子顕微鏡（SEM：JEOL JSM-IT100）（SEM-EDS）を用いて、岩石表面の組成像による観察を行った。あらかじめ分析領域（約5 mm四方）に20μm厚程度の炭素膜を蒸着した。表面は研磨せずに現存の状態で行った。そのため検量線を用いた絶対定量は行わずに、Factory Standardsに格納された標準試料のデータを用いて、簡易定量を行った。分析値はすべてトータルを100wt%に規格化した。測定後にアセトンで蒸着膜を除去した。

2. 結果

岩石片の比較的平坦な面で、SEM-EDSによる組成像を観察したところ、径のサイズが30μm以下（シルト～粘土サイズ）の碎屑粒子から構成されることが判明した。粒子のサイズから、シルト岩（泥岩の一種）であると推定される。構成粒子のうち、組成像で明暗の異なる4粒（#2、#4、#5、#6）を選び、EDSを用いて組成分析を行った。以下に各点の測定結果を述べる。



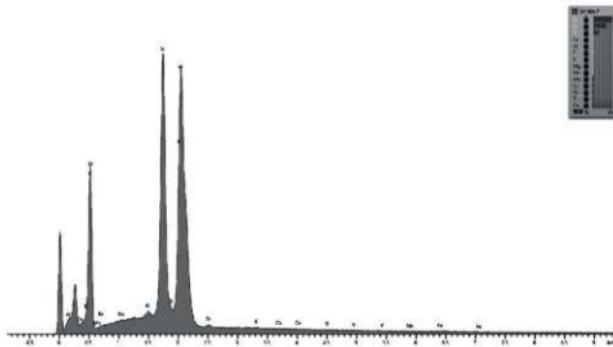
第5.1図 SEM-EDSによる試料の電子線像

3. 粒子# 2

まず^a、組成像がかなり明るいことから重元素に富むことが予想される。分析の結果、 $\text{SiO}_2=32\text{wt}\%$ 、 $\text{ZrO}_2=66\text{wt}\%$ を含み、SiとZrの陽イオン比が1:1であること、陽イオン数の合計と酸素数の比が1:2であることからジルコン(ZrSiO_4)の粒子と考えられる。

第5.1表 粒子# 2簡易定量値

酸化物	酸化物 %	酸化物 % σ	付箇数(酸素数 8)
Na_2O	0.06	0.05	0.01
MgO	0.12	0.05	0.01
Al_2O_3	0.61	0.06	0.04
SiO_2	32.22	0.22	1.96
P_2O_5	0.37	0.28	0.02
K_2O	0.09	0.05	0.01
CaO	0	0.05	0
TiO_2	0	0.08	0
Cr_2O_3	0.01	0.09	0
MnO	0.03	0.09	0
FeO	0.42	0.1	0.02
NiO	0.01	0.13	0
ZrO_2	66.05	0.35	1.96
	100		4.03 (カチオン合計)



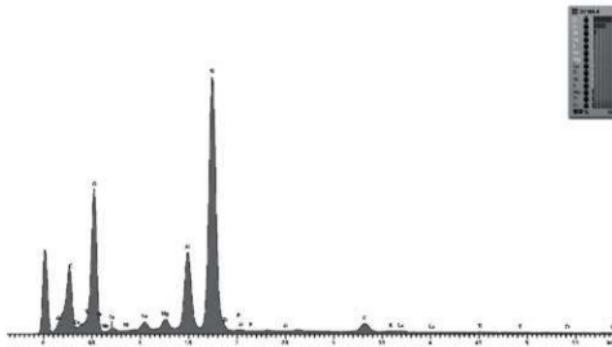
第5.2図 粒子# 2スペクトル図

4. 粒子 # 4

この粒子は組成像がかなり暗いので、重元素に乏しく、軽元素に富む粒子であると予想される。測定したところ、 $\text{SiO}_2=70.5\%$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3=17.2\%$ 、 $\text{FeO}=4.6\%$ 、 $\text{K}_2\text{O}=2.6\%$ 、 $\text{MgO}=2.0\%$ 、 $\text{Na}_2\text{O}=1.7\%$ となつた。シリカとアルミを主体とする粒子であることから、流紋岩質な組成をもつ岩片と考えられる。

第5.2表 粒子#4簡易定量値

酸化物	酸化物 %	酸化物 % σ	付箇数(酸素数8)
Na_2O	1.68	0.07	0.14
MgO	2.02	0.07	0.13
Al_2O_3	17.21	0.15	0.88
SiO_2	70.5	0.32	3.07
P_2O_5	0.23	0.11	0.01
K_2O	2.63	0.07	0.15
CaO	0.45	0.06	0.02
TiO_2	0.46	0.09	0.02
Cr_2O_3	0	0.09	0
MnO	0.05	0.1	0
FeO	4.58	0.17	0.17
NiO	0.18	0.15	0.01
ZrO_2	0.02	0.18	0
	100		4.60(きかん合計)



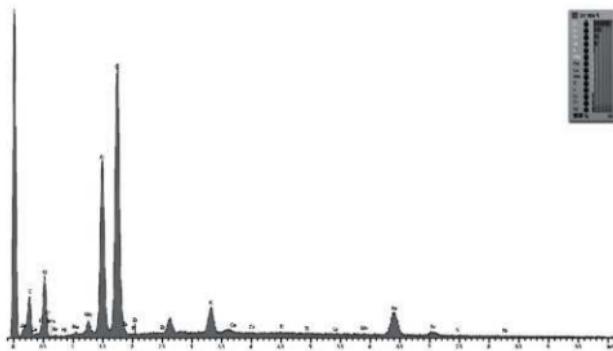
第5.3図 粒子#4スペクトル図

5. 粒子# 5

この粒子は他の粒子とは異なり、 SiO_2 に比較的乏しく(48%)、 Al_2O_3 (25%)と FeO (19%)および K_2O (4.9%)に富むのが特徴である。このような組成を持つ鉱物は知られておらず、何らかの岩片である可能性が高い。一方、岩石片としてもアルカリ玄武岩的な組成を持つが、 Fe/Mg 比が高く、 Na/K 比が極端に低い特殊な組成を持つ。

第5.3表 粒子# 5簡易定量値

酸化物	酸化物 %	酸化物 % σ	付箇数(酸素数8)
Na_2O	0.35	0.07	0.03
MgO	1.53	0.1	0.11
Al_2O_3	24.97	0.28	1.44
SiO_2	48.19	0.42	2.36
P_2O_5	0.13	0.13	0.01
K_2O	4.89	0.13	0.31
CaO	0.29	0.12	0.02
TiO_2	0.24	0.19	0.01
Cr_2O_3	0	0.2	0
MnO	0.25	0.22	0.01
FeO	19.16	0.41	0.78
NiO	0	0.35	0
ZrO_2	0	0.22	0
	100		5.07(きず合計)



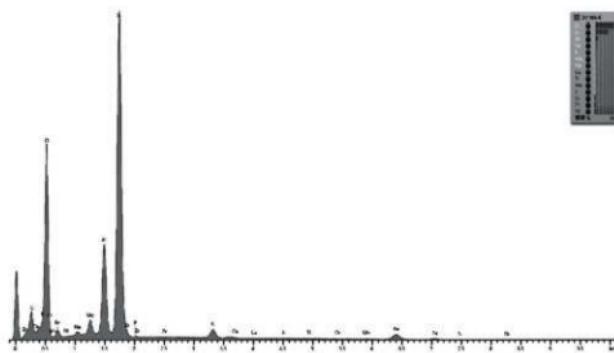
第5.4図 粒子# 5スペクトル図

6. 粒子 # 6

4 の粒子とほぼ同一の組成をもつ。流紋岩質な組成をもつ岩片と考えられる。

第 5.4 表 粒子 # 6 簡易定量値

酸化物	酸化物 %	酸化物 % σ	付箇数(酸素数 8)
Na ₂ O	0.54	0.05	0.05
MgO	2.42	0.06	0.16
Al ₂ O ₃	16.32	0.12	0.83
SiO ₂	72.81	0.25	3.15
P ₂ O ₅	0.1	0.08	0
K ₂ O	2.13	0.05	0.12
CaO	0.13	0.04	0.01
TiO ₂	0.14	0.07	0
Cr ₂ O ₃	0.01	0.07	0
MnO	0.09	0.07	0
FeO	5.31	0.13	0.19
NiO	0	0.11	0
ZrO ₂	0	0.13	0
	100		4.51 (きず合計)



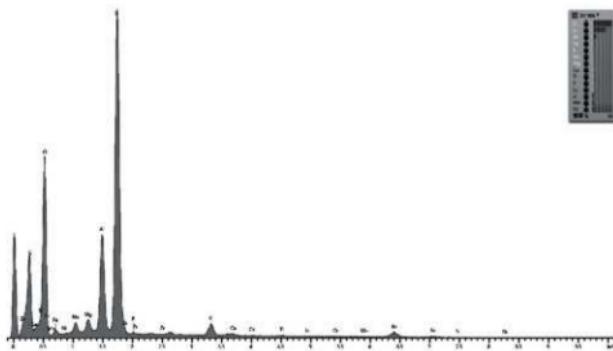
第 5.5 図 粒子 # 6 スペクトル図

7. 面分析

最後に、 $250\mu\text{m} \times 200\mu\text{m}$ 四方の面積を電子線で走査して平均組成を求めたところ、 $\text{SiO}_2=70\text{wt\%}$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3=17\%$ 、 $\text{FeO}=4.8\%$ となり、珪長質な組成を有することが分かった。これらの組成は粒子 # 4 および # 6 の組成と似ている。岩石全体としてシリカとアルミに富む泥岩である。

第 5.5 表 面分析簡易定量値

酸化物	酸化物 %	酸化物 % σ	付加数(酸素数 8)
Na_2O	1.67	0.07	0.14
MgO	1.94	0.07	0.13
Al_2O_3	17.19	0.15	0.88
SiO_2	70.27	0.31	3.07
P_2O_5	0.3	0.11	0.01
K_2O	2.73	0.07	0.15
CaO	0.46	0.06	0.02
TiO_2	0.42	0.09	0.01
Cr_2O_3	0.12	0.09	0
MnO	0	0.1	0
FeO	4.8	0.17	0.18
NiO	0	0.15	0
ZrO_2	0.1	0.18	0
	100		4.60 (きず合計)



第 5.6 図 面分析スペクトル図

第2節 上原E遺跡における火山灰分析

株式会社古環境研究所

はじめに

津南町に所在する上原E遺跡では、立川ローム層上部とされる層位からその上位の黒ボク土層にかけて、旧石器時代や縄文時代の遺構や遺物が検出されている。本報告では、その層位に含有されるテフラ（火山噴出物）由来の碎屑物の産状を明らかにして、土層の層序対比の指標を得る。

1. 試料

試料は、TP02 拡張区北壁および深掘区北壁の2か所の土層断面より採取された。調査区内の土層断面は、発掘調査所見により、上位よりI層からVI層まで分層され、そのうちのIII層は、III a、III b、III c の各層に細分されている。I層は黒色を呈する火山灰土いわゆる黒ボク土層であり、II層は黒ボク土層からローム層への漸移層、III層以下は褐色を呈する火山灰土いわゆるローム層に相当する。

本報告では、拡張区北壁で採取されたIII a、III b の各層と深掘区北壁で採取されたIII c 層の計3点の土壤試料を対象とする。

2. 分析方法

試料約20 gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状等の塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

また、検出された軽石または火山ガラスについては屈折率の測定を行い、テフラ同定のための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3. 結果

テフラ分析結果を第5.6表に示す。III a層には、少量の火山ガラスと少量の軽石が認められる。火山ガラスは、無色透明の軽石型を主体とし、極めて微量の無色透明のバブル型も含まれる。軽石は、最大径約1.9mmであり、白色を呈し、発泡は良好である。III b層およびIII c層には、中量の火山ガラスが含まれる。火山ガラスは無色透明のバブル型を主体とし、少量の無色透明の軽石型をともなう。

第5.7図に、III a層の軽石とIII b層とIII c層の火山ガラスの屈折率を示す。III a層の軽石の屈折率は、レンジがn1.499–1.503であり、モードはn1.502である。III b層とIII c層の火山ガラスの屈折率は、ほぼ同様であり、レンジの下限はn1.497または1.498であり、上限はn1.502または1.503であり、ともにn1.498–1.500に高い集中度を示す。

第5.6表 テフラ分析結果

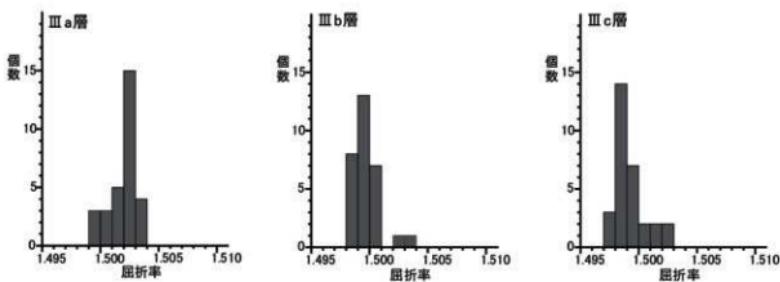
層名	スコリア	火山ガラス		軽石		
	量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径
III a	-	++	c1·pm>c1·bw	++	W·g	1.9
III b	-	+++	c1·bw>c1·pm	-		
III c	-	+++	c1·bw>c1·pm	-		

-:含まれない、(+)：きわめて微量、+：微量、++：少量、+++：中量、++++：多量。

W:白色。

g:良好、sg:やや良好、sb:やや不良、b:不良、最大粒径はmm。

c1:無色透明、br:褐色、bw:バブル型、md:中間型、pm:軽石型。



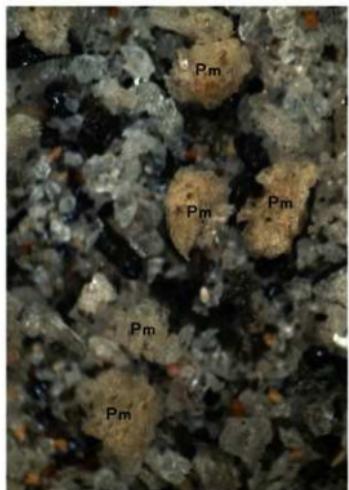
第5.7図 火山ガラスの屈折率

4. 考察

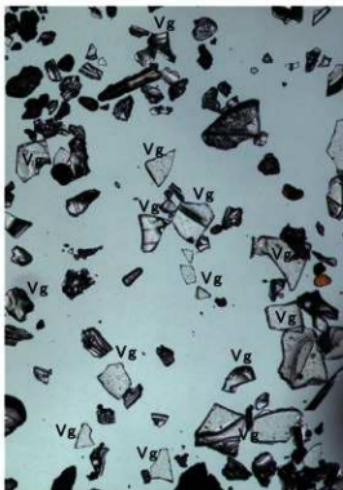
III a 層から検出された軽石は、色調や発泡度および屈折率とローム層最上部という検出層位、さらには津南町という遺跡の地理的位置により、浅間火山から噴出した浅間草津テフラ (As-K: 町田・新井 2003) に由来すると考えられる。As-K の噴出年代は、暦年で 1.5 ~ 1.65 万年前とされ、北関東地域で広く認められている浅間板鼻黄色テフラ (As-YP: 新井 1962) と同一噴火輪廻のテフラとされている（町田・新井 2003）。なお、III b 層以下からは軽石は全く検出されないことから、As-K の降灰層準は III a 層付近にあることが推定される。なお、III a 層から検出された少量の火山ガラスのうち、軽石型のほとんどは As-K に由来すると考えられるが、バブル型のものは、その形態により、下記の AT に由来すると考えられる。

III b 層および III c 層から中量検出された火山ガラスは、その形態と屈折率から、鹿児島湾奥の姶良カルデラを給源とする姶良 Tn テフラ (AT: 町田・新井 1976) に由来すると考えられる。AT の降灰年代については、Smith et. al. (2013) による福井県の水月湖のボーリングコアの年縞堆積物の研究事例に基づき、暦年で 30,000 年前であることが定まった。

本遺跡における AT の降灰層準は、III c 層以下にあると推定されるが、IV 層以下における AT の火山ガラスの産状が不明であるため、それ以上の詳細な推定は不能である。



1. As-Kの軽石 (TP02拡張区北壁: IIIa層)



2. ATの火山ガラス (TP02拡張区北壁: IIIb層)



3. ATの火山ガラス (深掘区北壁: IIIc層)

第5.8図 軽石及び火山ガラス

第6章 考察

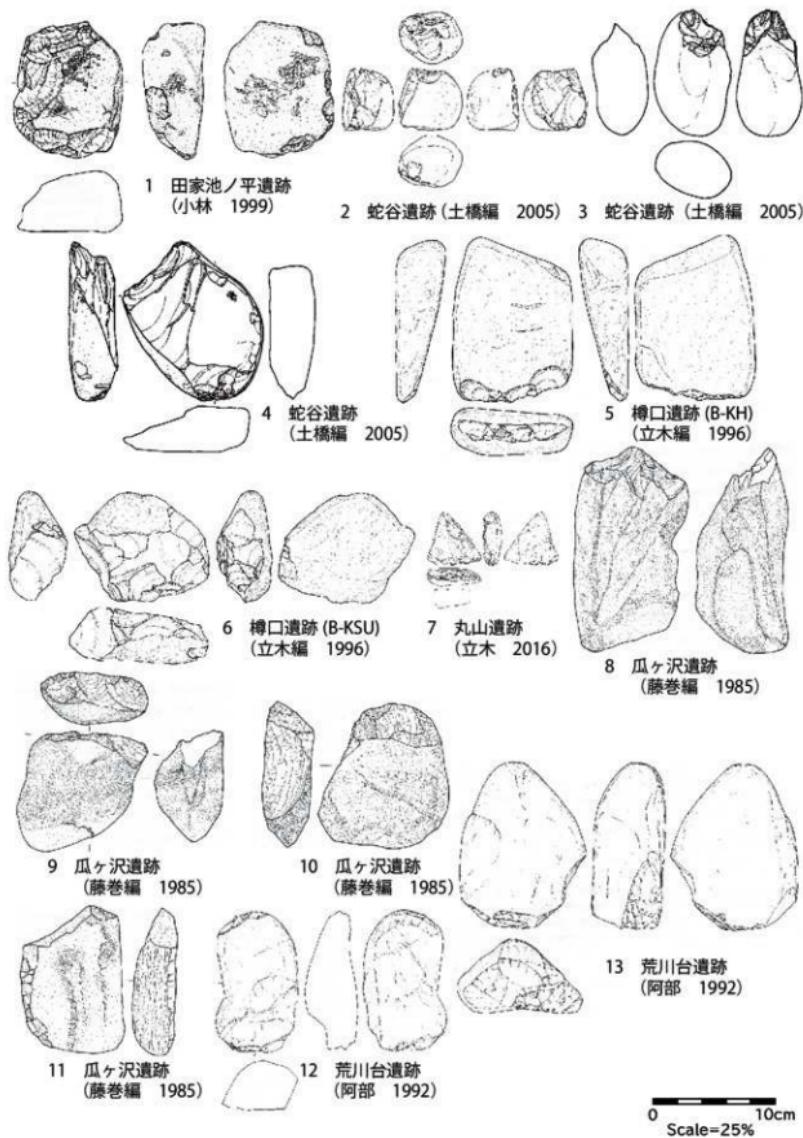
第1節 新潟県内出土片刃礫器の集成

本節では新潟県内における礫器の出土事例を集成し、本遺跡出土礫器と県内他事例との比較を試みる。本遺跡出土礫器はⅢ b 層から出土しており、上位のⅢ a 層が As-K の降灰層準と推定されることから、対象は後期旧石器時代前半期から繩文時代草創期とする。なお、本遺跡で出土した礫器は片面からのみ加工が施される片刃礫器、いわゆるチョッパーであることと、織笠昭（1992）が指摘したように両刃礫器と石核の区別が困難であることから、集成対象も片刃礫器に限定する。そのため両刃礫器、いわゆるショッピング・トゥールは除外している¹⁾。「礫器」と報告され刃部形状に言及がない資料に関しては実測図から判断し、判断ができなかったものについては除外した²⁾。

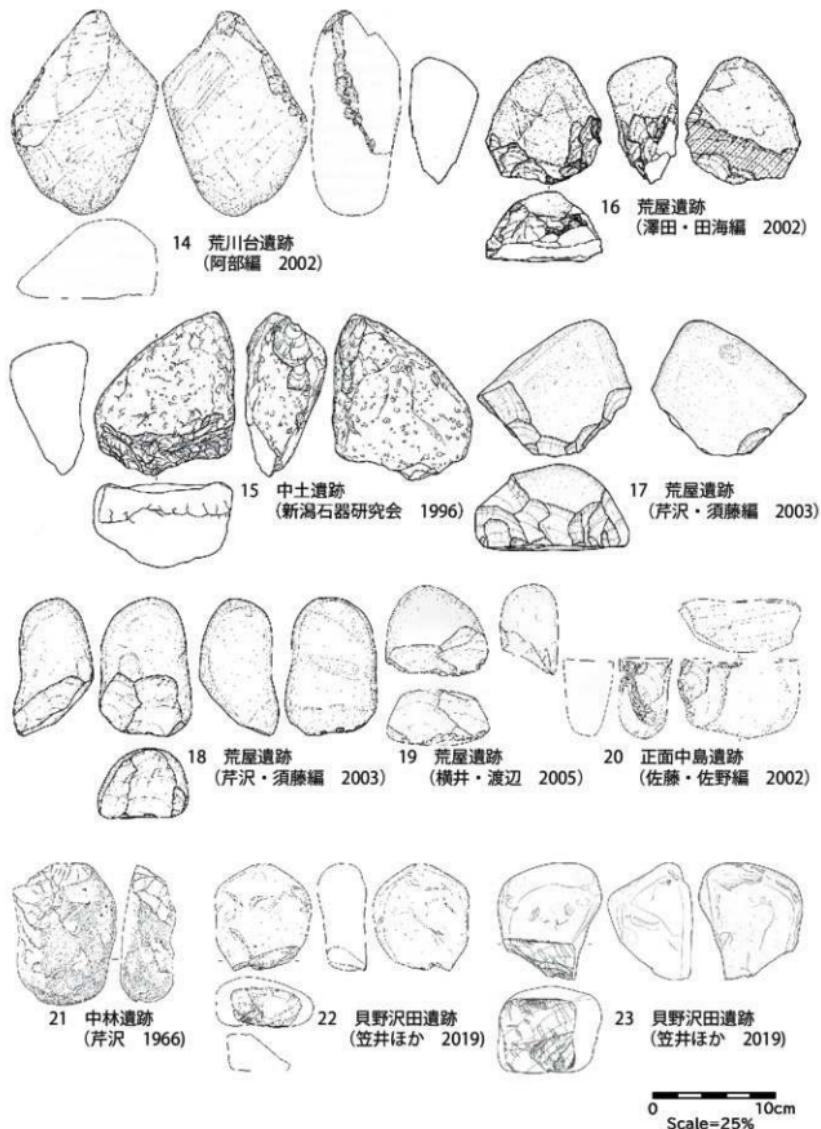
片刃礫器の集成では、織笠（1992）による先行研究がある。日本列島全城を対象とし、本県でも三条市中土遺跡の事例が取り上げられた。その後、2010 年に公開された日本旧石器学会のデータベース『日本列島の旧石器時代遺跡』では、2006 年時点での本県において 13 遺跡（14 石器群ないし文化層）から礫器が出土しているとされる（日本旧石器学会 2010）。うち 9 遺跡は採集資料とされており、90 年代からの増加傾向には先学の綿密な踏査の成果が表れている。本節では同データベースをもとに、その後の事例を加える形で集成を行った。ただし、データベースで「礫器」とされていても、原典をもとに片刃礫器ではないと判断した資料は除外している。

本節では、本遺跡が立地する津南段丘の編年基準（佐藤 2019c）をもとに県内全城の礫器の時間関係の整理を試みる。本編年で、後期旧石器時代は I ~ V 期に分けられる。I 期は AT 層下位に包含される石器群であり、先端左右が交差する基部調整ナイフ形石器と局部磨製石斧を含む。正面ヶ原 D 遺跡が標識遺跡とされる。II 期は AT 層を挟んで 2 段階に分けられる。胴抜原 A 遺跡の東山石器群が II 1 期、大原北 I 遺跡の小形切断石器を保有する石器群が II 2 期にあたる。III 期は杉久保石器群の出現前夜とされ、基部調整ナイフ形石器をともなう洗峰 A 遺跡が位置付けられる。また、III 期には国府系石器群の流入も想定されている。IV 期は杉久保石器群が隆盛する時期であり、細石刃石器群の流入前と考えられる。しかし、杉久保石器群の終焉段階になると尖頭器石器群の流入がみられ、並行関係も想定される。V 期は As-K の下位、もしくは介在する石器群である。V 期の石器群について佐藤雅一（2019c）が触れたのは細石刃石器群のみであるが、本編年をもととした周辺地域の編年（笠井 2019、桑原 2019）では、十日町市干溝遺跡や湯沢町大刈野遺跡に代表される大型尖頭器石器群も V 期に含まれることから、本節でも細石刃石器群・大型尖頭器石器群を V 期とする。ただし、大型尖頭器石器群は後期旧石器時代終末期に分類した。

県内では現在、片刃礫器が 32 点確認されている。単独出土は 9 点のみで、多くは他の遺物と共に伴して出土している。台形様石器群では新発田市田家池ノ平遺跡で 1 点が採集されている（第 6.1 図 1、小林 1999）。ナイフ形石器をともなう石器群では上越市蛇谷遺跡（土橋編 2005）で AT 下位のナイフ形石器にともなって 3 点（同図 2 ~ 4）、村上市（旧朝日村）樽口遺跡（立木編 1996）の B-KH 文化層で東山型ナイフ形石器にともなって 1 点（同図 5）、B-KSU 文化層で杉久保型ナイフ形石器にともなって 1 点（同図 6）、加茂市丸山遺跡（立木 2016）で杉久保型



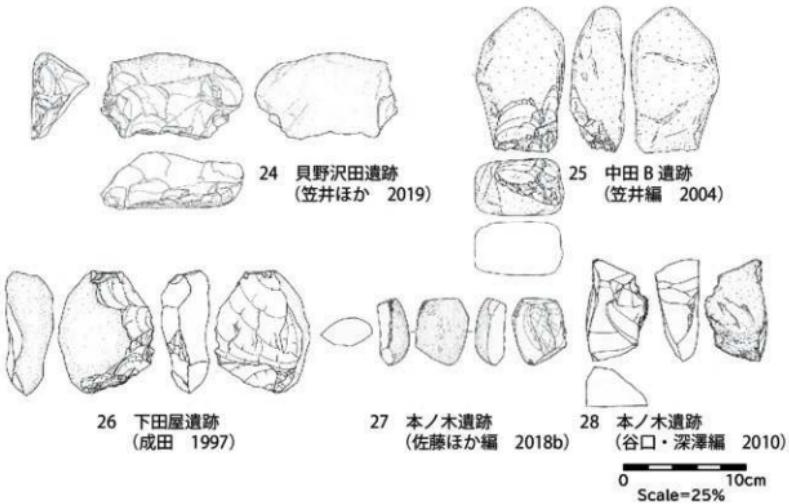
第6.1図 新潟県内出土片刀砾器 1



第6.2図 新潟県内出土片刃礫器 2

第6.1表 新潟県内出土の後期旧石器時代～縄文時代草創期の片刃礫器

遺跡名	市町村	時期	石器群・土器群など	編年 (佐藤2019)	片刃礫器 点数	石材 (註1)	方法	出典
田家池ノ平	新発田市	後期旧石器時代前半期	(台形種石器)	I	1	片麻岩	表掲	小林 1999
蛇谷	上越市	後期旧石器時代前半期	ナイフ形石器(片下位)	I	3	安山岩・チャート	表掲	上橋 2005
椿口	村上市	後期旧石器時代後半期	東山型ナイフ形石器	II	1	花崗閃綠岩	発掘	立木編 1996
(B-KSU)	椿口	後期旧石器時代後半期	杉久保型ナイフ形石器	IV	1	変成岩	発掘	立木編 1996
丸山	加茂市	後期旧石器時代後半期	杉久保型ナイフ形石器	IV	1	頁岩	発掘	立木 2016
瓜ヶ沢	魚沼市	後期旧石器時代	ナイフ形石器	I ~ IV	4	硬質砂岩・砂岩・安山岩	発掘	藤巻編 1985
荒川台	荒川村	後期旧石器時代後半期	細石刀	V	2	千明	発掘	阿部 1992
荒川台	荒川村	後期旧石器時代後半期	細石刀 (櫛柱式)	V	1	火成岩の一種	発掘	阿部編 2002
中土	三条市	後期旧石器時代後半期	細石刀	V	1	凝灰岩	発掘	新潟石器研究会 1996
荒屋	長岡市	後期旧石器時代後半期	細石刀	V	4	頁岩1点・不明3点	発掘	澤田・田海編 2002
荒屋	長岡市	後期旧石器時代後半期	細石刀	V	2	凝灰岩	発掘	芹沢・須藤編 2003
荒屋	長岡市	後期旧石器時代後半期	(細石刀)	V	1	黑色砂岩	表掲	横井・渡辺 2005
正面中島	津南町	後期旧石器時代後半期	細石刀	V	1	緑色凝灰岩	発掘	佐藤・佐野編 2002
中林	十日町市	後期旧石器時代終末期	尖頭器	V	1	砂岩	発掘	芹沢 1966
貴野沢田	十日町市	後期旧石器時代終末期	尖頭器	V	3	頁岩・凝灰岩	発掘	芝井ほか 2019
中田B	十日町市	縄文時代草創期	格子状压痕灰土器		1	凝灰岩	発掘	菅井編 2004
下田屋	三条市	不明			1	灰褐色の頁岩	その他	成田 1997
越那B	津南町	不明			1	不明	発掘	佐藤・石坂編 2004
本ノ木	津南町	不明 (根塵及?出土)			1	頁岩?	発掘	佐藤ほか編 2018b
本ノ木	津南町	不明			1	黒色頁岩	発掘	谷口・深澤編 2010



第6.3図 新潟県内出土片刃礫器 3

ナイフ形石器にともなって1点（同図7）出土している。また、魚沼市（旧堀之内町）の瓜ヶ沢遺跡（藤巻編 1985）で4点出土している（同図8～11）。細石刀石器群では、関川村荒川台遺跡（阿部 1992、阿部編 2002）で計3点（同図12・13、第6.2図14）、中土遺跡（中村 1965、新潟石器研究会 1996）で1点（同図15）、長岡市（旧川口町）荒屋遺跡（澤田・田海編 2002、芹沢・須藤編 2003、横井・渡辺 2005）で計7点（同図16～19）、津南町正面中

第6.2表 片刃礫器の時期・地域別点数

	阿賀野川水系以北	県央・西蒲	魚沼・刈羽・頸城	合計
I	1	0	3	4
II	1	0	0	1
III	0	0	0	0
IV	1	1	0	2
V	3	1	12	16
縄文時代 草創期	0	0	1	1
時期不明	0	1	7	8
合計	6	3	23	32

島遺跡（佐藤・佐野編 2002）で1点（同図20）が出土・採集されており、県内で確認されている片刃礫器の大部分はこの細石刃石器群に属する。統いて大型尖頭器石器群では、十日町市（旧中里村）中林遺跡（芹沢 1966）で1点（同図21）、同市貝野沢田遺跡（笠井ほか 2019）で3点（同図22・23、第6.3図24）が出土している。縄文時代草創期には十日町市中田B遺跡（笠井編 2004）で縦条体压痕土器にともなって1点（同図25）が出土している。なお、瓜ヶ沢遺跡ではナイフ形石器の基部破片が出土しており、礫器4点はそれより古いと想定されているため（藤巻編 1985）、おおむねI～IV期のいずれかと想定されるが詳細時期については不明とした。次に、三条市下田屋遺跡の1点（同図26）についてであるが、この遺物は工事にともなってローム層を深くまで掘り下けた際の排土周辺から採集されたものであり、旧石器時代のものであると判断されている（成田 1997）。しかし、深さについて詳細の記述がないこと、層位的に抜き取られたものではないこと、片刃礫器と同時に採集された他の遺物から時代を判断することが困難であることから、時期不明と判断した。また、津南町越那B遺跡（佐藤・石坂編 2004）の1点及び同町本ノ木遺跡（佐藤ほか編 2018b、谷口・深澤編 2010）の計2点（同図27・28）についても出土層位や共伴遺物の情報が不足しているため、時期不明とした。

次に、新潟県内における片刃礫器の帰属時期についてまとめる。時期別にみると、後期旧石器時代前半期が4点、後期旧石器時代後半期15点、後期旧石器時代終末期4点、縄文時代草創期1点、後期旧石器時代であるが詳細時期が不明のものが4点、時期が不明のものが4点である。また、時期を判別できたものについて佐藤（2019c）の編年をもとに分類すると、片刃礫器の点数はI期が4点、II期が1点、III期が0点、IV期が2点、V期が16点であり、新潟県内では片刃礫器の帰属時期はV期が多い傾向がある。新潟県を①阿賀野川水系以北、②県央・西蒲、③魚沼・刈羽・頸城の3区分で分けると、①が6点、②が3点、③が23点となる。③魚沼・刈羽・頸城地域が最も多く、本遺跡出土資料もこの中に位置付けられる。同地域については、時期が判断できる片刃礫器16点のうちV期が12点と大半を占める。

最後に、片刃礫器に使用された石材について検討する。現時点で、新潟県内出土の片刃礫器に利用された石材の割合としては、堆積岩を多用する傾向がみられ、V期で特にこの傾向は顕著である。上原E遺跡で出土した片刃礫器（実測図版1-2）はIII～V期に分類されると考えられる（本章次節）。堆積岩の一種であるシルト岩が素材として用いられることも、県内出土片刃礫器の傾向からみて自然であると言える。ただし、安山岩など火成岩系石材の利用も認められることから、片刃礫器においては、他の石器に見られるような特定の石材を選択する意図³⁾は弱く、様々な石材を使用しているように見受けられる。片刃礫器に用いられた石材の産地につ

第6.3表 片刃礫器の時期・石材別点数

	堆積岩系	火成岩系	不明	合計
I	2	2	0	4
II	0	1	0	1
III	0	0	0	0
IV	1	1	0	2
V	10	1	5	16
縄文時代 草創期	1	0	0	1
時期不明	6	1	1	8
合計	20	6	6	32

いては、在地系のものが多いことを織笠（1992）が指摘している。個別資料の検討では、荒川台遺跡（阿部 1992）、荒屋遺跡（芹沢・須藤編 2003、横井・渡辺 2005）、丸山遺跡（立木 2016）、貝野沢田遺跡（笠井ほか 2019）の片刃礫器が在地または近隣地域の石材で製作されたと推測されている。本遺跡の片刃礫器の素材となったシルト岩については、現在産地については判明していないが、周辺地域での石材調査を実施することにより、これらの遺跡との対比が可能になるだろう。

（飯内俊樹・南村鷹弥・岩野 輝）

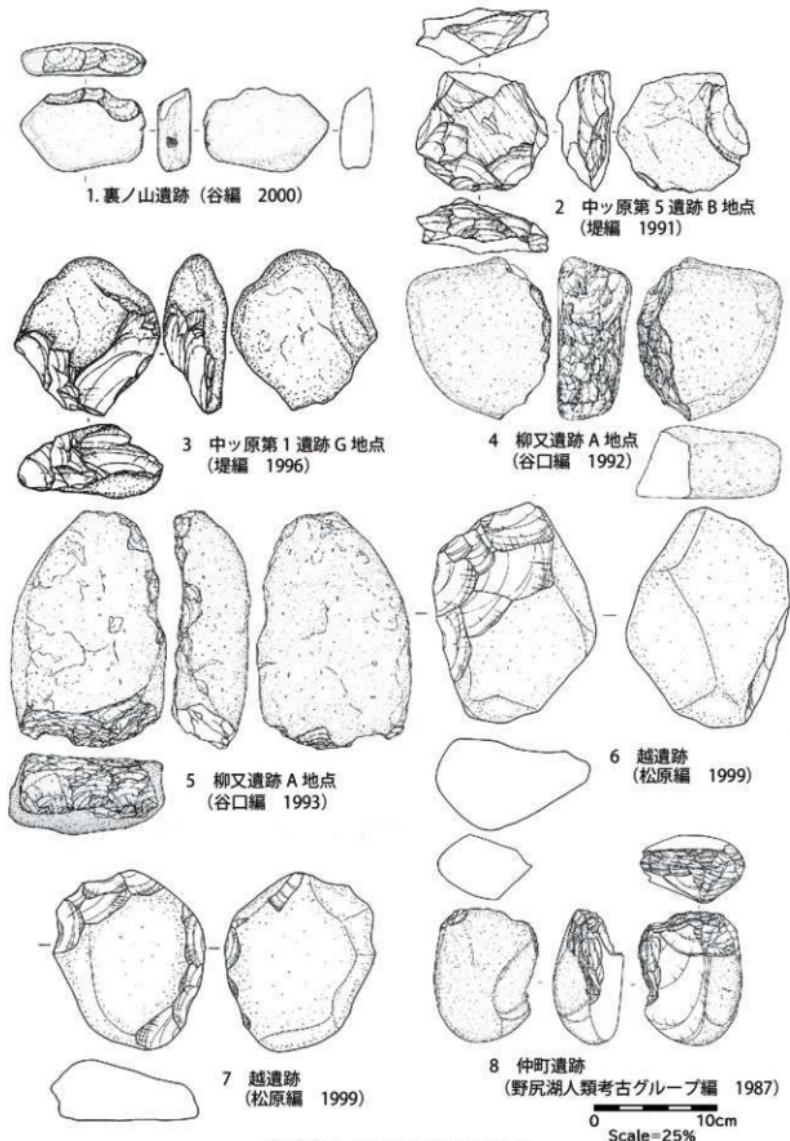
第2節 上原E遺跡出土礫器の位置づけ

第4章で述べたように、本調査ではIII b層最下部よりシルト岩製の片刃礫器が出土した（実測図版1-2）。本節では、前節で集成した県内の事例を踏まえながら、周辺地域の様相を概観し、本遺跡出土礫器の位置付けを検討する。ただし、本節では全事例の集成ではなく、周辺地域の代表的な事例を挙げて様相を捉えるのみとする。

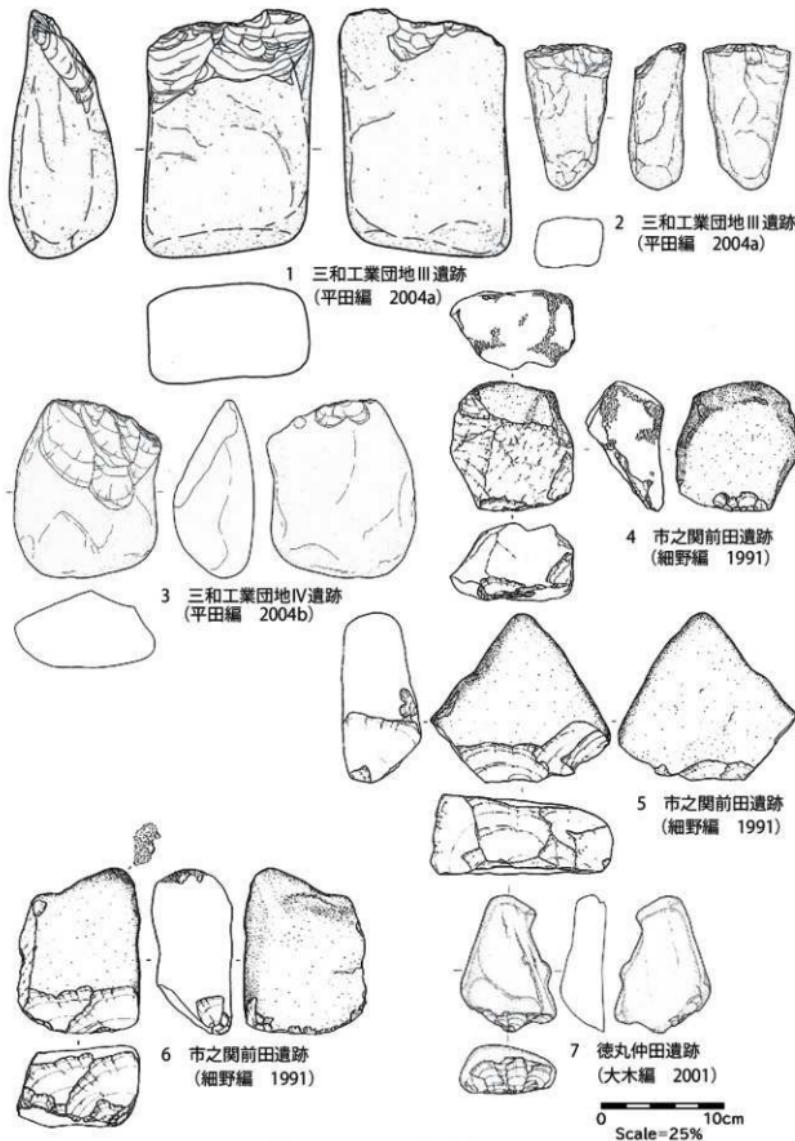
南に位置する長野県では、野尻湖遺跡群の信濃町裏ノ山遺跡で台形石器・茂呂型ナイフ形石器などとともに出土している（第6.4図1、谷編 2000）。細石刃石器群でも、湧別技法札滑型を主体とする南牧村中ッ原第5遺跡B地点（同図2、堤編 1991）・同第1遺跡G地点（同図3、堤編 1996）、木曾町（旧開田村）柳又遺跡A地点（同図4・5、谷口編 1992・1993）のほか、稜柱系細石刃石器群の木曾町（旧開田村）越遺跡（同図6・7、松原編 1999）で出土している。越遺跡では表採でも片刃礫器が得られている（三浦 1988）。縄文時代草創期では、爪形文・無文土器とともに野尻湖遺跡群の信濃町仲町遺跡（同図8、野尻湖人類考古グループ編 1987）の事例が挙げられる。

東に位置する群馬県では、火山灰との層位的関係が明らかな遺跡からも出土している。伊勢崎市三和工業団地III遺跡のAT下位で台形様石器・ナイフ形石器とともに出土する（第6.5図1・2、平田編 2004a）ほか、同IV遺跡の「浅間YP軽石」（浅間板鼻黄色軽石：As-YP）下位から「浅間SP軽石」（浅間白糸軽石：As-Sr）上位にかけての細石刃石器群でも出土している（同図3、平田編 2004b）。前橋市（旧宮城村）市之関前田遺跡でもAs-YP下位、As-Sr相当から出土する細石刃石器群とともに12点の礫器が出土しており（同図4～6、細野編 1991）、少なくともうち9点は片刃のものである。桐生市（旧新里村）武井遺跡内出東地区では、As-YP～浅間大窪沢第1軽石（As-OP1）・As-Srと想定されるIII層の槍先型尖頭器石器群から出土している（加部 2000、阿久澤 2000）。前橋市徳丸仲田遺跡ではAs-YP相当から隆起線文土器とともに出土している（同図7、大木編 2001）。

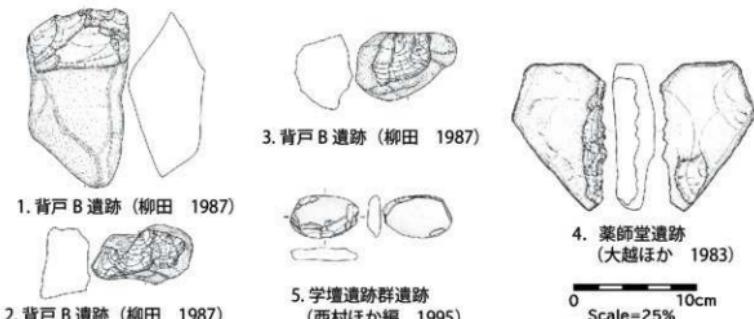
東に位置する福島県では、石川町背戸B遺跡・薬師堂遺跡、郡山市学壇遺跡群で関連資料が出土している。背戸B遺跡では3点の片刃礫器が「東山型」・「茂呂型」のナイフ形石器をともない、AT及び「暗色帶」上位と位置付けられている（第6.6図1～3、柳田 1987・2015）。薬師堂遺跡では茂呂型ナイフ形石器が出土しており、表採で2点の片刃礫器（同図4）が得られているが、報告書（大越ほか 1983）では縄文時代の所産と想定されている。学壇遺跡群ではB地区遺構外より「二次加工ある礫」（同図5）が出土している（西村ほか編 1995）。扁平な礫に片面加工で刃部を設けたものだが、石核調整段階の可能性も挙げられている。ナイフ形石器や細石刃のほか縄文石器も同層から出土していることから編年的位置づけも明らかでない。



第6.4図 長野県内出土片刀縁器



第6.5図 群馬県内出土片刃礫器



第6.6図 福島県内出土片刃礫器関連資料

後者2遺跡出土資料の位置づけが定まっていないが、仮に旧石器時代の所産としても県内で3遺跡のみであり、新潟・長野・群馬と比較すると出土事例は限定される。

この傾向はより北方の山形県でも同様である。大石田町角二山遺跡においては加藤稔による1970年の発掘調査で礫器⁴⁾が12点出土したとされる（加藤 1973、桜井 1992）ほか、近年の東北大学による調査でも片刃礫器が5点出土している（Kanomata et al. 2022）。一遺跡としては比較的多い点数が出土しているが、その他の遺跡は断片的であり、地域的に見れば希薄と言える。

なお、白滝型細石刃石器群が確認された上原E遺跡の2000年調査（佐藤ほか編 2018c）では礫器が出土していない。同石器群では、岐阜県飛騨市宮ノ前遺跡16層で礫器⁵⁾が出土しているとされる（早川ほか編 1998）が、同石器群の他遺跡では確認されていない。

新潟県及び隣県の様相を見ると、新潟・長野・群馬では比較的の出土遺跡が多い。時期によつて多寡はあるものの、AT下位の後期旧石器時代前半期から縄文時代草創期にかけて出土している。織笠昭（1992）や堤隆（1997）が指摘したように、石刃石器群に極めて少なく、細石刃石器群になると卓越するという傾向は今日においても変わらないことが確認できる。この傾向は、出土遺跡が少ない山形県においても角二山遺跡からは礫器が多く出土している点からもうかがえる。一方で、前節の結果も踏まえると、出土事例の多い新潟・長野・群馬では細石刃石器群に次いでAT下位の台形石器・台形様石器をともなう石器群で多く出土しているという傾向もみられる。

本調査での火山灰分析（第5章第2節）では、As-Kの降灰層準がIII a層付近、ATの降灰層準がIII c層以下にあると推定された。この結果は、2000年調査の火山灰分析（大塚ほか 2018）に基づく、「III 1層最上位にAs-K層（浅間一草津火山灰層）が堆積し、III 3層最下部にAT（始良一丹沢火山灰）の降灰ピーク」とする報告書（佐藤ほか編 2018c）の見解とも矛盾しない。これらを踏まえると、III b層最下部から出土した礫器は、両火山灰の降灰間に位置付けられる。礫器出土地点はIII a層上部から10cm、III c層下部から14cm離れている（第4章第1節）ことから、両火山灰の降灰直前に位置付けることは難しい。

これらの所見をもとに本遺跡出土礫器を津南段丘の編年（佐藤 2019c）に当てはめるとすれば、所属時期はⅢ期～Ⅴ期に位置付けられる。Ⅲ期は「杉久保石器群の出現前夜」で「基部加工ナイフ形石器が健在」、「国府系石器群の流入」が想定されている。Ⅳ期は「細石刃石器群の流入以前」で「杉久保石器群が隆盛」するとされ、その終末期には「尖頭器石器群が流入し、一部、編年学的に並行する可能性」が想定される。Ⅴ期には2000年調査の本遺跡（佐藤ほか編 2018c）を含めて、細石刃石器群が位置づけられる（佐藤 2019c）。本節で示した新潟県及び周辺地域の礫器出土傾向と合わせて検討すると、Ⅴ期の細石刃石器群の可能性が高いとも言えるが、Ⅲ・Ⅳ期の遺跡でも出土事例があるため、時期を限定することは難しい。ただし、本遺跡の2000年調査で白滝型細石刃石器群が出土した「Ⅲ 1層」は本調査のⅢa層にあたるため、白滝型よりも相対的に古い石器群に帰属すると考えることは可能だろう。このことを踏まえ、本遺跡出土礫器は佐藤（2019c）の編年で言えばⅢ・Ⅳ期もしくはⅤ期の稜柱系・湧別技法札滑型ないしホロカ技法による細石刃石器群もしくは大型尖頭器石器群に帰属する可能性を指摘しておく。

（青木要祐）

註

- 1) 例えば、新潟市（旧新津市）愛宕澤遺跡（立木編 2004）の縄文時代草創期石器群で礫器が出土しているが、これらは両刃と判断して本集成には含めていない。
- 2) 加用中条A遺跡や蛇谷遺跡、中土遺跡、本ノ木遺跡において、文中や器種組成で礫器の概要や点数が記載されているが、その他の言及や図示が無いため片刃・両刃の判断ができなかった資料がある。また糸魚川市川倉遺跡（糸魚川市編 1986）では、ハンドアクセスや砥石とされている資料の一部に片刃礫器のような加工が施されたものがあるが、実測図片面のみの提示に留まるため片刃礫器かどうか判断できなかった。このほか、新潟県立歴史博物館収蔵の星野洋治コレクション目録（官尾編 2013）に掲載された佐藤雅一ほか作成の同コレクション一覧には、上川村小瀬ヶ沢・川口町西倉・六日町市上ノ原・津南町本ノ木・関川村荒川台の項で「礫器」と記されている。ただし、同一覧の「礫器」は「磨石、敲石、凹石、穀磨石など」とされ、片刃礫器を含むか明らかでないため、本節では扱っていない。これらのなかに片刃礫器が含まれている可能性もある。
- 3) 例えば上原E遺跡の細石刃関連資料においては、黒曜石や硬質頁岩といった特定の石材を利用する傾向がみられる（佐藤ほか編 2018c）。
- 4) 器種組成で礫器の点数が示されているものの、その他の言及や図示が無いため、片刃・両刃の確認ができない。
- 5) 報告書（早川ほか編 1998）では出土した3点のうち1点が図示されているが、当該資料は刃角が直角に近く、一部では刃部から裏面への剥離も認められるため、石核の可能性もある。

第7章 総括

令和4（2022）年度に新潟県中魚沼郡津南町大字上郷大井平に所在する上原E遺跡の発掘調査を実施し、本書ではその成果を報告した。

本遺跡では国営農地再編整備事業にともなって2000年に津南町教育委員会による緊急調査が行われ、東北日本でも発掘事例の少ない白滝型細石刃石器群の一括資料が得られた（佐藤ほか編 2018c）。本調査では白滝型細石刃石器群の遺物分布範囲確認などを目的として2000年調査範囲の南方に調査区を設定し、調査面積30m²で2022年9月に実施した。その結果、白滝型細石刃石器群に帰属する明確な資料は得られなかつたものの、2点の石器が出土したほか、遺跡の土層堆積状況に関して知見が得られた。

東西に約11m離れた大井平5474-1（A区）・5475-2（B区）を調査区として10か所のトレンチを設定したところ、おおむね2000年調査1号石器集中・2号石器集中の南方に位置するA区では細石刃石器群の遺物包含層と考えられるIIIa層が残存していたが、西に位置するB区においてはIIIa層が薄く、擾乱も多くみられたことから、細石刃石器群の遺物包含層が残存していない可能性が想定された。なお、火山灰分析（第5章第2節）ではIIIa層が浅間草津テフラ（As-K）の降灰層準と推定され、始良Tnテフラの降灰層準はIIIc層以下にあると推定された。

石器はII層から安山岩製のハンマーストーン、IIIc層から泥岩の一種であるシルト岩製の礫器が出土した。礫器の石材は、肉眼観察及びエネルギー分散型検出器付き走査電子顕微鏡による分析（第5章第1節）で鑑定されたものである。ハンマーストーンが出土したII層と同一の層準からは、2000年調査で白滝型細石刃石器群の一部が出土していることから、同石器群に帰属する可能性もあるが共伴遺物がないため判断は難しい。As-Kよりも上位であることから古く位置付けることはできないが、縄文時代まで所属時期が下る可能性も否定はできない。

IIIb層から出土した礫器は片刃のもので、チョッパーとも呼べるものである。第6章第1節では後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけて新潟県内で出土した片刃礫器を集成した。時期ごとにみると細石刃石器群が突出して多いが、前半期の台形様石器をともなう石器群や後半期のナイフ形石器をともなう石器群での出土事例もあり、各時期で認められた。

同第2節では隣接する4県の様相を示した。長野・群馬県では新潟県同様に比較的多く出土していることがうかがえたが、福島・山形県では出土事例が乏しい。時期でみると前節同様に細石刃石器群が多いことが確認されたが、次いで多く出土しているのはAT下位の台形石器・台形様石器をともなう石器群とみられる。本遺跡での礫器出土層位と火山灰分析の結果を合わせて考えると、津南段丘編年（佐藤 2019c）のIII～V期、特に白滝型細石刃石器群よりも古相に位置付けられる可能性が指摘された。

本遺跡出土石器は他の遺物が共伴しない単独出土資料だが、出土層位や火山灰分析、周辺地域での出土事例などから判断すると、2000年調査（佐藤ほか編 2018c）で出土した白滝型細石刃石器群よりも古い時期に、人類が本遺跡で活動していたことを示すと考えられる。

（青木要祐）

引用文献一覧（紙面の都合上、論文名・書名の副題は割愛させていただいた）

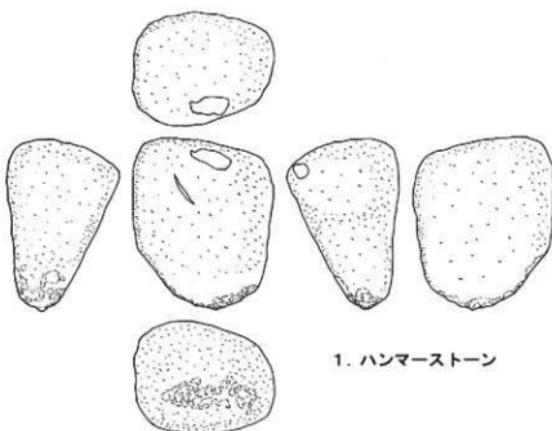
- 青木要祐 2021「宮城県栗葉山 No. 34 遺跡と新潟県上原E 遺跡から考察する細石刃製作技術の変容」『宮城考古学』23 pp. 117-134
- 青木要祐 2022「上原E 遺跡における石材利用と細石刃核の分類」『晩冰期・細石刃文化の資源利用』苗場山麓ジオパーク振興協議会 pp. 77-79
- 青木要祐・佐々木繁喜 2021「津南町上原E 遺跡出土黒曜石製石器の原産地分析」『苗場山麓ジオパーク研究集録』3 pp. 50-62
- 安久澤智和 2000「武井遺跡内出東地区の石器群とその分布」『第8回岩宿フォーラム / シンポジウム 槍先形尖頭器文化期の集落と武井遺跡 予稿集』笠懸町教育委員会・新里村教育委員会・岩宿フォーラム実行委員会 pp. 16-23
- 阿部朝衛 1992「新潟県関川村荒川台遺跡第1次調査報告」『法政考古学』18 pp. 1-136
- 阿部朝衛編 2002『荒川台遺跡』帝京大学文学部史学科
- 新井房夫 1962「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10 pp. 1-79
- 糸魚川市編 1986『糸魚川市史 資料集1』糸魚川市
- 魚沼地域洞窟遺跡発掘調査団編 2008『黒姫洞窟遺跡』魚沼市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 魚沼地域洞窟遺跡発掘調査団編 2017『黒姫洞窟遺跡』魚沼市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 大木紳一郎編 2001『徳丸仲田遺跡(1) (縄文時代草創期編)』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書279
- 大越道正・橋本博幸・松本 茂 1983「薬師堂遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告13』福島県文化財調査報告書113 pp. 10-138
- 大塚富男・高浜信行・ト部篤志 2018「津南町内遺跡に関する火山灰分析および火山灰層序」『上原E 遺跡』津南町文化財調査報告書74 pp. 268-273
- 大場正善・鈴木 雅・渡邊安奈・村田弘之・川口 亮・山中一郎・会田容弘 2014「新潟県津南町権ノ木平遺跡第3次発掘調査」『第27回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』東北日本の旧石器文化を語る会 pp. 43-57
- 岡部牧夫 1985『自然編 第1節 歴史をささえる大地』『津南町史 通史編』上巻 津南町役場 pp. 3-17
- 岡本東三・佐藤雅一編 2016『本ノ木遺跡第一次・第二次発掘調査報告書』津南町文化財報告書70
- 小熊博史・立木宏明 2017「信濃川における細石刃石器群関係資料(1)」『長岡市立科学博物館研究報告』第52号 pp. 51-56
- 織笠 昭 1992「日本列島における片刃礫器と丹生1-B地点北区第2群石器の位置付け」『大分県丹生遺跡群の研究』古代學研究所研究報告3 pp. 461-524
- 笠井洋祐編 2004『中田B遺跡・中田D遺跡』中里村文化財調査報告書11
- 笠井洋祐 2019「波海川流域」『新潟県の考古学III』新潟県考古学会 pp. 19-21
- 笠井洋祐・石原正敏・ト部厚志 2019『貝野沢田遺跡発掘調査報告書』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書66
- 加藤 学編 2019『本ノ木・田沢遺跡群総括報告書』新潟県埋蔵文化財調査報告書284
- 加藤 稔 1973「東北地方の旧石器文化(後編)」『山形県立山形中央高等学校研究紀要』3 pp. 1-28
- 加藤 稔・酒井忠一・宇野修平・佐藤慎宏・長沢正機・海野丈芳 1982「最上川・荒川流域の細石刃

- 文化』『最上川』山形県総合学術調査会 pp. 768-819
- 鹿又喜隆編 2018 「旧石器時代から縄文時代への移行に関する実践的研究」『Bulletin of the Tohoku University Museum』17 pp. 9-113
- 加部二生 2000 「武井遺跡内出東地区（第III次調査）の調査」『第8回岩宿フォーラム／シンポジウム 横先形尖頭器文化期の集落と武井遺跡 予稿集』笠懸町教育委員会・新里村教育委員会・岩宿フォーラム実行委員会 pp. 12-15
- 桑原 健 2019 「魚野川流域～信濃川との合流部付近」『新潟県の考古学III』新潟県考古学会 pp. 22-23
- 桑原 健 2022 「魚野川流域における細石刃石器群の様相」『晩冰期・細石刃文化の資源利用』苗場山麓ジオパーク振興協議会 pp. 16-26
- 小菅将夫・加藤 学・諸星良一・青木要祐・笠井洋祐・佐藤雅一・佐藤信之・桑原 健・櫻井美枝・沢田 敦・長崎潤一・山田しょう 2022 『晩冰期・細石刃文化の資源利用』苗場山麓ジオパーク振興協議会
- 小林達雄編 1980 『壬遺跡』國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄編 1981 『壬遺跡 1981』國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄編 1982 『壬遺跡 1982』國學院大學文学部考古学実習報告 3
- 小林達雄編 1983 『壬遺跡 1983』國學院大學文学部考古学実習報告 5
- 小林達雄編 1987 『壬遺跡 1987』國學院大學文学部考古学実習報告 13
- 小林 弘 1999 「新発田市田家池ノ平遺跡採集の旧石器(1)」『北越考古学』10 pp. 55-63
- 佐久間光平 2015 「本州における『打面に掠痕のある黒曜石製細石刃核』の新たな事例と石器群の評価について」『宮城考古学』17 pp. 57-72
- 佐久間光平 2018 「北方系細石刃石器群と神子柴・長者久保石器群の共存」『宮城の旧石器時代遺跡』宮城県考古学会旧石器部会 pp. 89-94
- 桜井美枝 1992 「細石刃石器群の技術構造 山形県角二山遺跡の分析」『東北文化論のための先史学歴史学論集』pp. 441-462
- 佐藤信之 2018 「正面中島遺跡を中心とした細石刃石器群の遺跡」『津南学』7 pp. 32-40
- 佐藤信之 2021 「魚沼地域の石材環境とその利用」『晩冰期・細石刃文化の資源利用』苗場山麓ジオパーク振興協議会 pp. 2-6
- 佐藤雅一 1986 「六日町上ノ原地区採集の石器」『魚沼文化』26 pp. 17-25
- 佐藤雅一編 1988 『大刈野遺跡』湯沢町埋蔵文化財報告 9
- 佐藤雅一 2002 「新潟県津南段丘における石器群研究の現状と展望」『先史考古学論集』11 pp. 1-52
- 佐藤雅一 2003 「遺跡の立地と集団の動き」『季刊考古学』83 pp. 37-41
- 佐藤雅一 2016 「津南段丘の形成と旧石器時代遺跡」『津南段丘の杉久保石器群 津南町シンポジウムIII予稿集』津南学叢書 28 pp. 2-28
- 佐藤雅一編 2017 「越那A遺跡」津南町文化財調査報告書 71
- 佐藤雅一 2019a 「大刈野遺跡の理解に向けて」『旧石器時代文化から縄文時代文化の潮流』六一書房 pp. 225-236
- 佐藤雅一 2019b 「第一章 水河期を生きた狩猟の民」『六日町史 通史編 第一巻 自然・先史・古代・中世』pp. 115-135
- 佐藤雅一 2019c 「津南段丘」『新潟県の考古学III』新潟県考古学会 pp. 16-18

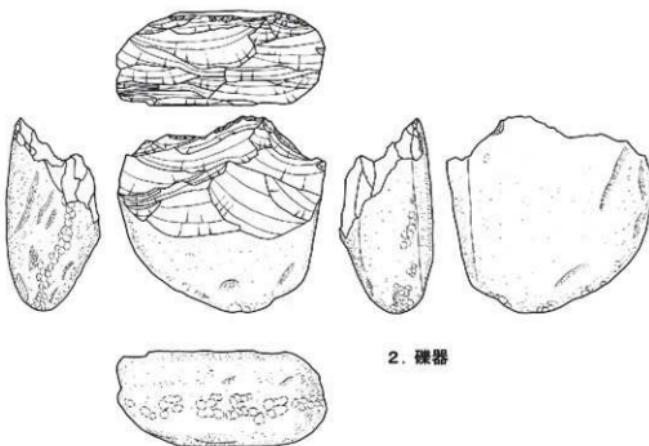
- 佐藤雅一 2020 「中部北部の移行期<上原E遺跡・大刈野遺跡を中心に>」『シンポジウム / 資源環境と人類 2020 旧石器から縄文』明治大学黒耀石研究センター pp. 9-16
- 佐藤雅一 2021 「信濃川流域における神子柴系石器群の消長」『新潟考古』32 pp. 11-30
- 佐藤雅一・石坂圭介編 1994 『干溝遺跡』中里村文化財調査報告書 6
- 佐藤雅一・石坂圭介編 2002 『貝坂桐ノ木平遺跡群<縄文時代編>』津南町文化財調査報告書 39
- 佐藤雅一・石坂圭介編 2003 『町内遺跡確認試掘調査報告書(2)』津南町文化財調査報告書 43
- 佐藤雅一・石坂圭介編 2004 『町内遺跡確認試掘調査報告書(4) (卯ノ木地区遺跡群・下別当遺跡)』津南町文化財調査報告書 45
- 佐藤雅一・今井哲哉・久保田健太郎・大久保聰・吉田邦夫・卜部厚志 2011b 『北林A遺跡・北林C遺跡』津南町文化財調査報告書 58
- 佐藤雅一・笠井洋祐編 2001 『久保寺南遺跡』中里村文化財調査報告書 9
- 佐藤雅一・佐藤信之・今井哲哉編 2018b 『本ノ木遺跡・卯ノ木南遺跡・家の上遺跡』津南町文化財調査報告書 73
- 佐藤雅一・佐藤信之・今井哲哉・林 幸大編 2018a 『堂尻遺跡群』津南町文化財調査報告書 72
- 佐藤雅一・佐藤信之・新海達也編 2018c 『上原E遺跡』津南町文化財調査報告書 74
- 佐藤雅一・佐藤信之・新海達也編 2021 『道下遺跡 旧石器時代編』津南町文化財調査報告書 79
- 佐藤雅一・佐野勝宏編 2002 『正面中島遺跡』津南町文化財調査報告書 37
- 佐藤雅一・渋谷賢太郎 2014 「縄文土器の誕生」『魚沼地方の先史文化』信濃川火焔街道連携協議会 pp. 44-57
- 佐藤雅一・長澤展生・岡 修司編 1998 『堂尻遺跡群試掘調査報告書』津南町文化財調査報告書 24
- 佐藤雅一・新田康則編 2002 『大原北遺跡群』津南町文化財調査報告書 38
- 佐藤雅一・古谷雅彦編 1999 『卯ノ木遺跡第2次調査報告書』津南町文化財調査報告書 29
- 佐藤雅一・古谷雅彦・中村真理編 2001 『正面ヶ原D遺跡』津南町文化財調査報告書 34
- 佐藤雅一・宮田千里編 1999 『下モ原II遺跡・小坂平遺跡』津南町文化財調査報告書 27
- 佐藤雅一・森先一貴・藤波啓容・卜部厚志 2011a 『加用中条A遺跡』津南町文化財調査報告書 56
- 佐藤雅一・山崎芳春編 2015 『胴抜原A遺跡』津南町文化財調査報告書 66
- 佐藤雅一・山崎芳春編 2022 『胴抜原B遺跡』津南町文化財調査報告書 81
- 佐藤雅一・山本 克編 2000 『下モ原I遺跡』津南町文化財調査報告書 32
- 佐藤雅一・山本 克編 2003 『別当遺跡群』津南町文化財調査報告 42
- 佐藤雅一・山本 克編 2005 『町内試掘確認調査報告書(5) <谷内地区遺跡群>』津南町文化財調査報告書 48
- 佐藤雅一・山本 克編 2006 『貝坂桐ノ木平遺跡群<旧石器時代編>』津南町文化財調査報告書 50
- 佐藤雅一・山本 克編 2019 『雨池A遺跡』津南町文化財調査報告書 76
- 佐藤雅一・山本 克・大久保聰・沢田 敦 2019 『しぐね遺跡』津南町文化財調査報告書 75
- 佐野勝宏 2002 「旧石器時代出土遺物のまとめ」『正面中島遺跡』津南町文化財調査報告書 37 pp. 189-203
- 澤田 敦・田海義正編 2002 『荒屋遺跡』川口町埋蔵文化財報告 3
- 信濃川火焔街道連携協議会編 2016 『魚沼地方の先史文化』信濃川火焔街道連携協議会
- 菅沼 宜 2003 「愛宕山遺跡採集の舟底形石器」『十日町市教育委員会文化財課年報』7 pp. 14-15
- 菅沼 宜 2004 「津南町屋敷田遺跡の荒屋型彫刻刀形石器」『越佐補遺些』9 pp. 2-3

- 須藤隆司 2009 「細石刃技術」『旧石器研究』5 pp.67-97
- 芹沢長介 1966 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究所研究報告』2 東北大
学日本文化研究所 pp.1-68
- 芹沢長介・須藤 隆編 2003 『荒屋遺跡 第2・3次発掘調査報告書』東北大学大学院文学研究科考
古学研究室・川口町教育委員会
- 谷 和隆編 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 信濃町内その1 裏ノ山遺跡・東裏
遺跡・大久保遺跡・上ノ原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 48
- 谷口康浩編 1992 『柳又遺跡A地点 第2次発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告 21
- 谷口康浩編 1993 『柳又遺跡A地点 第3次発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告 23
- 谷口康浩・深澤太郎編 2010 『新潟県中魚沼郡津南町 本ノ木遺跡 2007年度発掘調査報告書』國學
院大學文学部考古学実習報告 42
- 谷口康浩・深澤太郎・中村耕作編 2010 『本ノ木遺跡・卯ノ木泥炭層遺跡 2008年度発掘調査報告書』
國學院大學文学部考古学実習報告 43
- 立木宏明編 1996 『樽口遺跡』朝日村文化財報告書 11
- 立木宏明編 2004 『愛宕澤遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 立木宏明 2016 『丸山遺跡』『加茂市史 資料編4 考古』加茂市 pp.40-95
- 立木宏明 2019 『遺跡の分布・遺跡群及び立地』『新潟県の考古学III』新潟県考古学会 pp.26-28
- 塙原秀之・桑原 健・佐藤信之 2021 『千曲川一信濃川流域の石器石材環境』『千曲川一信濃川流域
の先史文化』津南学叢書 40 pp.93-103
- 堤 隆編 1991 『中ッ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 堤 隆編 1996 『中ッ原第1遺跡G地点の研究II』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 堤 隆 1997 「更新世末期における礫器使用行動の意味」『長野県考古学会誌』82 pp.29-41
- 津南町教育委員会文化財班 2021 『廣田永二コレクションについて(1)』『苗場山麓ジオパーク研究
集録』3 pp.78-104
- 鶴丸俊明編 2008 『北海道東・北部の細石刃文化の研究』札幌学院大学人文学部
- 十日町市史編さん委員会編 1996 『十日町市史・資料編2・考古』十日町市
- 土橋由理子編 2005 『蛇谷遺跡・炭山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 151
- 中澤 純・江口友子編 1998 『屋敷田III遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 88
- 中村孝三郎 1961 「越後の石器」『長岡市立科学博物館研究報告』2 pp.53-88
- 中村孝三郎 1965 「中土遺跡」『長岡市立科学博物館研究調査報告』7 pp.1-56
- 中村孝三郎・小林達雄 1983 「月岡遺跡」『日本の旧石器文化 2 遺跡と遺物<上>』pp.242-254
- 中村由克 1986 「野尻湖・信濃川中流域の旧石器時代遺跡群と石器石材」『信濃』38-4 pp.1-16
- 中村由克 2007 「石器石材としての玉髓の原産地とその調査法」『新潟考古』18 pp.153-164
- 成田健太郎 1997 「下田村下田屋遺跡採集の石器群」『越佐補遺些』2 pp.1-4
- 新潟石器研究会 1996 「新潟県中土遺跡出土遺物の再検討」『長岡市立科学博物館研究報告』31
pp.123-158
- 西村博幸・秦 文夫・閔 大編 1995 『学壇遺跡群』福島市埋蔵文化財報告書 67
- 日本旧石器学会編 2010 『日本列島の旧石器時代遺跡』日本旧石器学会
- 野尻湖人類考古グループ編 1987 『野尻湖遺跡群の旧石器文化I』『野尻湖発掘の考古学的成果I』
- 早川正一・河野典夫・立田佳美・小島 功編 1998 『岐阜県吉城郡宮川村 宮ノ前遺跡発掘調査報告書』

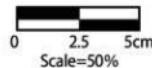
- 岐阜県・宮川村教育委員会
パリノ・サーヴェイ株式会社 2018「上原E遺跡の自然科学分析」『上原E遺跡』津南町文化財調査報告書 74 pp. 249–267
- 平田貴正編 2004a『三和工業団地III遺跡』伊勢崎市文化財調査報告書 54
- 平田貴正編 2004b『三和工業団地IV遺跡』伊勢崎市文化財調査報告書 55
- 広田永二・中澤幸男 1994「津南町の縄文時代草創期遺跡」『新潟考古』5 pp. 105–118
- 藤巻正信編 1985『関越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 瓜ヶ沢遺跡・滝沢の塚・七久保遺跡・苗場山城跡』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 31
- 古澤 明 1995「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』101 pp. 123–133
- 細野貴伯編 1991『市之閖前田遺跡I発掘調査報告書』宮城村教育委員会
- 堀川正美・渋木宏人 2010「五十嵐川流域の石器石材について」『三条考古学研究機関誌』4 pp. 46–52
- 町田 洋・新井房夫 1976「広域に分布する火山灰」『科学』46 pp. 339–347
- 町田 洋・新井房夫 2003『新編 火山灰アトラス』東京大学出版会
- 松原和也編 1999『越遺跡』開田村教育委員会
- 三浦英俊 1988「越遺跡採集の遺物」『小馬背遺跡』國學院大學文学部考古学実習報告 15 pp. 25–26
- 宮尾 亨編 2013『新潟県立歴史博物館収蔵資料目録 考古資料 I 星野洋治コレクション』新潟県立歴史博物館
- 官城旧石器研究会 2014「加美町薬菜山麓の旧石器遺跡（3）」『官城考古学』16 pp. 107–120
- 宮田千里編 2008『洗峰遺跡群』津南町文化財調査報告書 52
- 村山 繁・佐藤雅一編 1997『神山遺跡群遺跡確認調査概要報告書』津南町文化財調査報告書 21
- 諸星良一 2022a「上原E遺跡の剥片製細石刃石核の技術形態の分析」『苗場山麓ジオパーク研究集録』4 pp. 57–77
- 諸星良一 2022b「上原E遺跡・樽口遺跡の細石刃石核の打面擦痕と構成面の観察」『公益社団法人日本文化財保護協会 紀要』6 pp. 39–48
- 柳田俊雄 1987「阿武隈川流域における旧石器時代の研究 1」『福島考古』28 pp. 1–32
- 柳田俊雄 2015「石川町背戸B遺跡の調査」『日本列島の東北地方と九州地方における後期旧石器時代石器群編年と比較研究』pp. 57–71
- 山本 克 2000「上原E遺跡」『平成12年度津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町文化財調査報告 33 pp. 18–21
- 横井 奏・渡辺雄大 2005「川口町荒屋遺跡採集石器の紹介」『越佐補遺些』10 pp. 2–7
- Kanomata, Y., Aoki, Y., Sasaki, S., Kumagai, R., Akoshima, K. and A. V. Tabarev. 2022 "Obsidian Transportation Across the Tsugaru Strait in the Context of the Late Pleistocene" Sobkowiak-Tabaka, I., A. Diachenko. And A. Wiśniewski (eds.), Quantifying Stone Age Mobility, Springer pp.69–94
- Smith, V.C., Staff, R.A., Blockley, S.P.E., Ramsey, C.B., Nakagawa, T., Mark, D.F., Takemura, K., Danhara, T., Suigetsu 2006 Project Members, 2013, Identification and correlation of visible tephras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronizing of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. *Quaternary Science Reviews*, 67, 121–137.



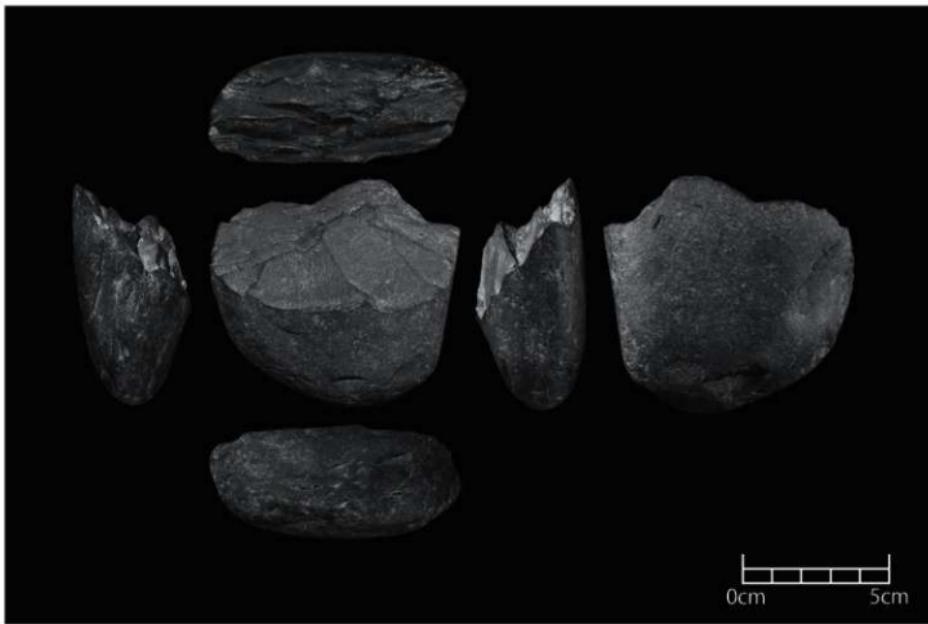
1. ハンマーストーン



2. 穧器



実測図版 1 上原 E 遺跡 2022 年度調査出土石器



(1) TP02 出土碟器 (Scale=60%)



(2) TP08 出土ハンマーストーン (Scale=100%)

写真図版2



(1) 上原 E 遺跡 A 区調査前現況（北東から）



(2) 上原 E 遺跡 A 区埋め戻し後（北東から）



(3) TP01 完掘状況（西から）



(4) TP02 出土礫器インプリント（北東から）



(5) TP02 完掘状況（東から）



(6) TP02 作業風景



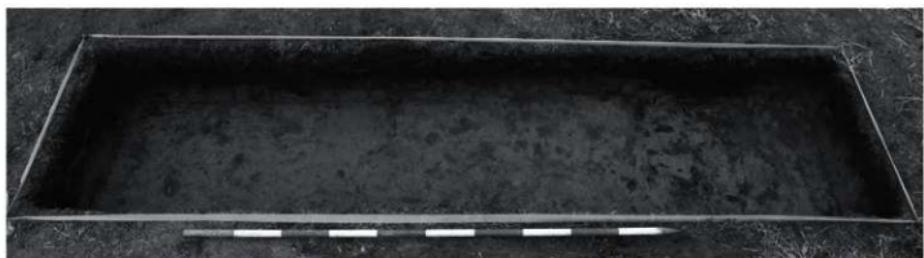
(7) TP02 作業風景



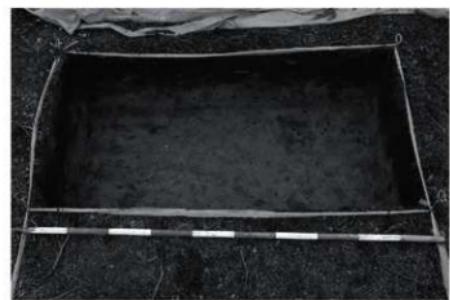
(1) TP03 完掘状況（北から）



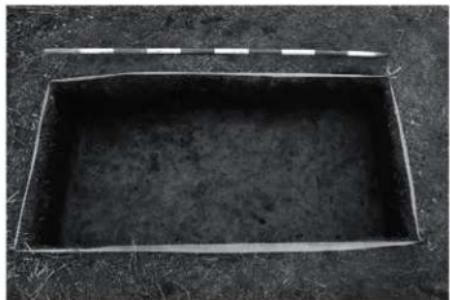
(2) TP03 セクション写真（東壁）



(3) TP08 完掘状況（南から）



(4) TP04 完掘状況（北から）



(5) TP09 完掘状況（南から）



(6) TP07 完掘状況（北から）

写真図版4



(1) 上原 E 遺跡 B 区調査前現況（北から）



(2) 上原 E 遺跡 B 区埋め戻し後（北から）



(3) TP05 完掘状況（北から）



(4) TP06 完掘状況（南から）



(5) TP10 完掘状況（北から）



(6) TP10 セクション写真（北壁）



(7) 調査区遠景
(矢印の交点が遺跡 北約5.9kmから)



(8) 2022 年度発掘調査集合写真

報告書抄録

ふりがな	かみはらいーいせき							
書名	上原E遺跡							
副書名	2022年度発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟大学考古学研究室調査研究報告							
シリーズ番号	23							
編著者名	青木要祐							
著者名	青木要祐・森 貴教・野村郁仁・宮島龍志・大島早紀・松本航太・飯内俊樹・山田 淳・岩野 順・笠原博雅・南村薫弥・高澤栄一・獣古環境研究所							
編集機関	上原E遺跡発掘調査団 新潟大学考古学研究室							
所在地	〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町 8050番地							
発行年月日	2023年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
かみはらいーいせき 上原E遺跡	なかうおめまだんづなんまち 中魚沼郡津南町	市町村	道路番号					
2022年度発掘調査	おおじょうざくみこうおねいだいさ 大字上郷大井平 5474-1・5475-2	154822	225	36° 58' 24"	138° 36' 22"	2022.9.10 ~ 2022.9.19	30.0	学術研究
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上原E遺跡	遺物包含地	後期旧石器	なし	ハンマーストーン 礫器	浅間草津テフラ (As-K) 上位より安山 岩製ハンマーストー ン1点、As-Kと始良 Tnテフラ(AT)の間 層からシルト岩製片 刃礫器が1点出土し た。			

上原E遺跡

—2022年度発掘調査報告書—

新潟大学考古学研究室調査研究報告 23

令和 5 (2023) 年 3 月 23 日

発行 上原E遺跡発掘調査団
新潟大学考古学研究室
新潟市西区五十嵐2の町8050番地
印刷 有限会社平電子印刷所
福島県いわき市平北白土字西ノ内 13
